

安東經濟概要

安東商工公會編

781

109



0021720000

0021720-000

781-109

安東經濟概要

安東商工公會・編

安東商工公會

康德5

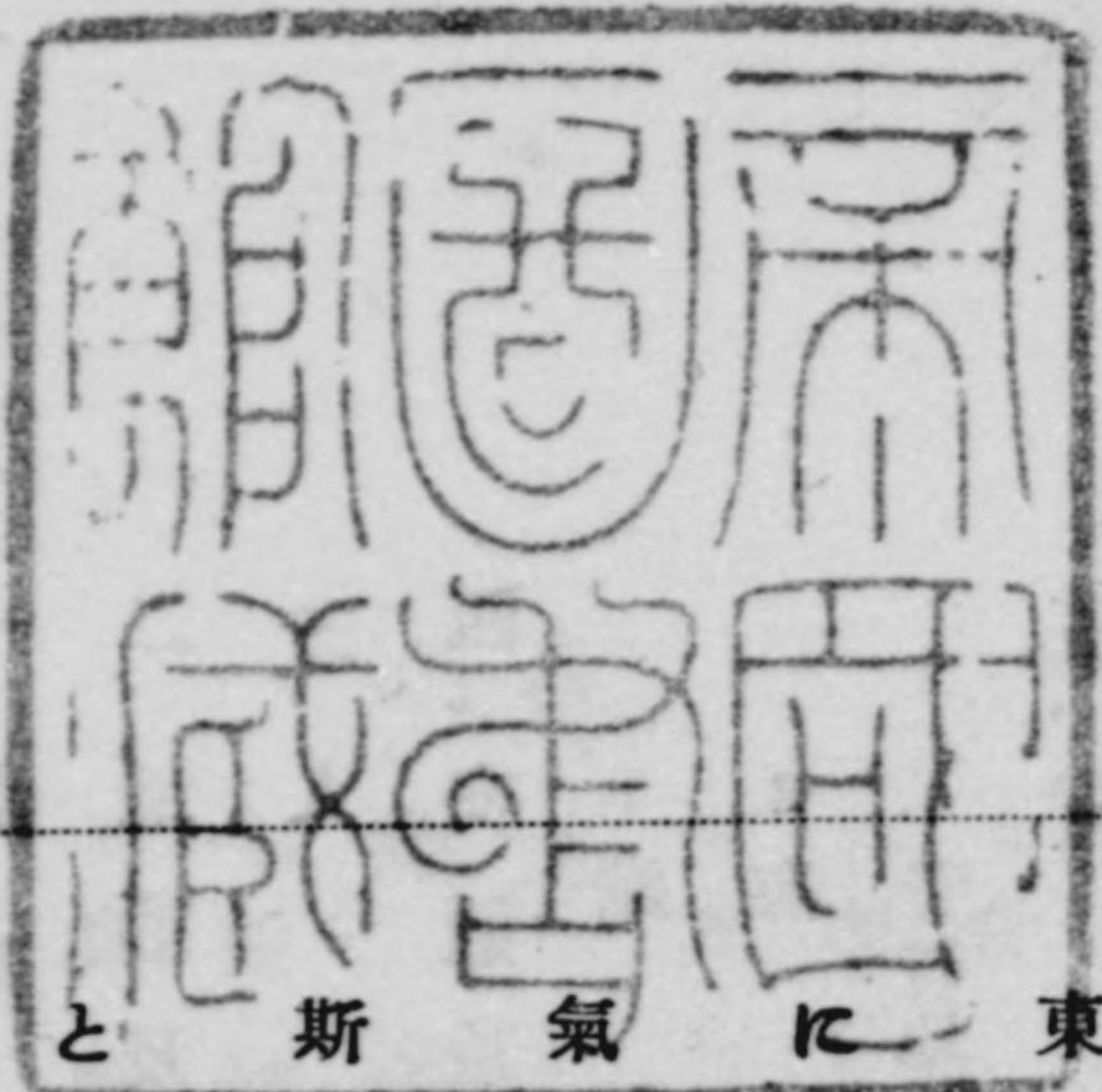
781
109

康德五年十二月

安東經濟概要

安東商工公會





はしがき

東邊道開發の魁をなす東邊道縦貫鐵道、鴨綠江水電等の着工、之に加へて最近鴨綠江河口港問題の擡頭は愈々大安東市出現の氣運を濃厚ならしめ多幸なる明日を約束づけられつゝある斯る折柄本冊子によつて安東經濟界の一端を紹介し幾分なりとも寄與する所あらば幸甚である



發行所寄贈本

安東經濟概要目次

一、沿革概説	一
二、地形及氣候	一
三、人口	二
四、交通及運輸	三
1. 鐵道	三
2. 海路	一三
3. 背後地との交通運輸	一四
五、貿易	一五
1. 概況	一五
2. 輸出	一八
3. 輸入	二二
4. 背後地との内國貿易	二五
5. 戎克貿易	二九
六、通信	三〇

七、商業

1. 日商概況	三一
2. 滿商概況	三一
3. 取引形態	三一
4. 滿商の經營形態	三一
5. 商業機關	三三
6. 倉庫	三七
7. 市場	三八
8. 夜店	三九

八、工業

概況	四〇
1. 製材業	四二
2. 油房業	四五
3. 柞蠶製糸業	五二
4. 棉布業	五六
5. 製紙業	五七
6. ゴム工業	六〇

安東經濟概要

一、沿革概説

滿鮮を劃する鴨綠江岸に國境都市として發展した安東は滿洲八景隨一の景勝地として又木材、柞蠶絲、豆粕の生産地として夙に人口に膨脹されて來たが爾來人口の増加と共に經濟界も漸進的に發展し遂に今日の如く全滿屈指の大都市としての面目を備へるに至つたものである。元來安東は山東移民によつて今より約六十年前即ち光緒初年期(明治十二年頃)に開拓された街であつて當時の市民は主として現在の滿洲街を中心に居住し日本人の來住は殆んど日露戰役後で主として舊附屬地に住居を構へたものであるその後米支條約に基き商埠地として開放され亞いで安奉線の廣軌改修、鴨綠江鐵橋の竣工に因つて東亞交通の要衝となり益々政治的に經濟的に重要視されるに至り殊に康德四年十二月鐵道附屬地の返還並に治外法權の徹廢によつて從來の滿洲街、附屬地及近郊を併せて一丸とする現在の大安東市の出現を見るに至つたものである。

二、地形及氣候

安東市の位置は北緯四十度六分五十二秒、東經百二十四度四十秒に在り前面は鴨綠江を隔て、朝鮮新義州側に對峙し背後は鎮江山、元寶山等の諸山を擔ひ江流に並行して南北に擴張した都市である。而して昨年の安東市制實施と同時に近郊を合併して現在では約四萬平方米の大都市となつて來た。

氣候は概して大陸的ではあるが冬季は所謂三寒四溫によつて調節され夏季は夜間の冷氣によつて緩和されるため大した苦痛

7. 精米業	六二
8. 醸造業	六五
9. 靴下製造業	七〇
10. 其他	七一
11. 勞力	七三
12. 電力	七五
九、金融	
1. 通貨	七六
2. 金融機關	七六
3. 金融狀況	七八
以上	

も感ぜられず全滿に於ては最も住み心持ちの良い都市とされてゐる。鴨綠江の結氷期は十二月下旬より始まり翌年三月下旬には解氷する。雨量は日本内地に比較すれば少量で一ヶ年平均一、〇〇〇耗位であり最も多い月は七、八月の梅雨期である。最近は人口増加と共に年々暖くなる傾向があつて冬季も漸次凌ぎよくなつて來てゐる様である。

左に最近の氣温及雨量を示すと

年 別	最高氣温	最低氣温	雨 量
大同二年	三三、五	二二、三	九二二耗
康徳元年	三三、二	二二、二	一、三五九〃
〃 二年	三三、一	二二、九	八八六〃
〃 三年	三二、三	二五、〇	一、一六六〃
〃 四年	不詳	不詳	不詳

三、人 口

安東の人口は年々増加を示してゐるが殊に滿洲事變以來内鮮滿人共激増し事變前に比較すれば現在(康徳五年六月末)は約日本内地人約六千人、鮮人七千五百人、滿人約四萬人の増加である。

尙昨年末の都市區劃改革により近郊を合併して市の總人口は左表の如く二十一萬七千五百九十九人を算へ日本内地の仙台市に匹敵する都市となつてゐる。

年 別	日本人	朝鮮人	滿洲人	其他	合計
民國二十一年末	二、二六	九、一八三	一三、七五九	五〇	一五、七九〇
大同元年末	二、六五八	二、四二五	一五、四三三	一四	一七、五〇九
〃 二年末	一三、四五五	一三、七一九	一五、〇一七	一七	一五、四九
康徳元年末	一四、〇三三	一三、三七	一五、三〇七	三六	一五、五八三
〃 二年末	一五、五五九	一五、四三六	一六、三五一	四九	一七、三九五
〃 三年末	一六、〇〇七	一五、八四	一六、四三三	五九	一八、三〇三
〃 四年末	一六、六二	一六、三〇	一七、三三八	五三	二〇、四三三
同 五月末	一七、三九	一六、五八三	一七、八九〇	四七	二〇、七九九
同 六月末					

四、交通及運輸

安東は水陸共に日鮮滿連絡の要衝にして大連、圖們と共に日本方面よりの入滿地として早くより經濟上に、國防上に重きをなして來てゐる。

左に海陸別にこれを記せば

(1) 鐵 道

元來安東は京義線、安奉線の連繫によつて歐亞連絡の幹線をなす重要地であり、これら兩線によつて日滿間最短時間の連絡あるため早くよりこの線の利用者多く逐年交通の頻繁を呈して來てゐる。安奉線の開通は明治三十八年(光緒三十一年)であつ

て其の後明治四十四年(宣統三年)これを廣軌に改修して愈々國際的幹線としての眞價を發揮し加之滿洲奧地方面との交通頻繁となるに至つて愈々經濟價值を昂めて來たのである。

陸路連絡による 下關—釜山間 一二六、〇軒
釜山—安東間 九四六、八軒

(イ) 旅客

◎安東驛旅客乗降五ヶ年比較表

區別	大同二年	康徳元年	同二年	同三年	同四年
滿洲線	一三三、八九人	一三四、二八人	一二六、六九八人	一三三、九二二人	一四〇、六八三人
内地及朝鮮線	一〇四、六五五	一二七、三四〇	一三三、六五九	一三三、九四五	一三三、一三三
計	二三七、五三三	二六一、〇二〇	二六〇、三五七	二六七、八六七	二七三、八一六
滿洲線	八三、四六九	一〇三、六四一	一〇九、三九四	一一四、三〇八	一二四、〇一七
内地及朝鮮線	一一四、九六六	一二五、〇五八	一二二、〇七七	一二七、六三九	一三四、六八三
計	一九七、三三五	二二八、六九九	二三一、四七一	二四一、九四七	二五七、七〇〇
乘客	四二五、五〇圓	三九三、一三七圓	四四九、六四〇圓	四九七、一三二圓	五八五、四六圓
内地及朝鮮線	四三、五六六	三九三、七三二	三六五、六五五	三六八、二七四	三三二、〇七八
計	八三九、一五六	七八六、八九九	八二五、三九五	八六五、四〇五	九六六、五三四

◎安東市内滿洲街にある沙河鎮驛の乗客五ヶ年比較を示せば

年別	乗客人員	降客人員	乗客賃金
大同二年	八、七八八人	九、〇三四人	二四、七九〇圓
康徳元年	八六、三五一	九八、五六四	二六、一九
同二年	一〇〇、八二四	一一三、三八	一三五、三三
同三年	一〇三、六三四	一一三、三八三	一五八、〇三七
同四年	一一七、〇八五	一二七、二八	二〇九、一九〇

(ロ) 貨物

◎安東驛貨物集散状況

安東驛及沙河鎮驛貨物八ヶ年比較表 (單位噸)

區別	年別	民國十九年	二十年	大同元年	二年	康徳元年	二年	三年	四年
安東發日本	一、七二〇	二、七二六	一、七七三	一、九九七	一、八三三	二、〇八二	一、六四四	二、〇六一	
安東發朝鮮	一〇三、四五一	九四、四三四	六七、五〇三	四九、八三七	六六、一三三	四八、四一九	四九、八七三	三四、八八九	
安東發滿洲	一一一、八四〇	五五、四三一	一一〇、三三一	三三三、六一一	三五九、四九六	三〇四、六三三	三〇一、九三九	二四一、五〇〇	
日本發安東	七、三八九	二、八三二	二、九七八	一〇、八三三	八、一九六	六、五〇八	七、四五〇	六、七五八	
朝鮮發安東	三三、〇五七	七九、三五四	三六、〇九七	六四、七九六	七二、四五三	五六、五六六	五八、二八三	七〇、一四三	
滿洲發安東	一八八、〇四五	一六四、九三六	一五九、四九六	一九七、二四八	三三四、五五三	三四五、八三三	二八八、〇一四	三三一、九〇四	
滿洲發日本	一、三九一	一、三二七	七三五	五二七	一、一五六	一、七五〇	一、三五五	一九、五〇三	

滿洲發朝鮮	五三、五六	四四、〇三三	五五四、〇四	五〇七、四六六	六三三、三六	五九〇、九六三	三〇五、四九五	六〇一、三二
日本發滿洲	一一、九〇	四、三九	六、三九一	一七、一五八	三〇、九九	二七、六九八	三九、三五	二八、〇四五
朝鮮發滿洲	三八、九三	二四、五八三	四三、〇九三	一三七、五八一	一四、七三八	一三、七二三	一〇四、〇四八	一一〇、四〇九
沙河鎮發送	三七、九七	二、八七五	一八、六九〇	三七、一一〇	三四、六九四	四一、二〇四	四〇、〇九九	三三、五九三
全 到着	八五、八七	一四〇、四〇八	一四、四七四	二〇、七七八	一一七、〇九三	一一〇、八三六	一四〇、二七三	一三四、四一

次に主要品別による貨物集散状況を示せば

◎安東驛發送

安東發日本向發送數量 (單位廳)		絹糸	小豆	其他	計
年別	區別				
民國十九年	〃	一四二	一、一〇一	四六八	一、七一〇
〃	二十年	六六七	六九六	一、三五三	二、七二六
大同 元年	〃	八六一	四二六	四九五	一、七三三
〃	二年	一、二〇三	二七五	五九	一、九九七
康德 元年	〃	一、一七九	二二六	四三八	一、八三三
〃	二年	一、一八四	二九〇	六〇八	二、〇八二
〃	三年	九七七	一六八	四七九	一、六四四
〃	四年	一、〇三八	四七七	五五六	二、〇六一

安東發朝鮮向發送數量

年別	區別	豆粕	大豆	小豆	木材	粟	紙類	其他	計
民國十九年	〃	五、四二	四、六五六	六、一〇五	三三、九八五	四、二四〇	九	八、二五	一〇三、四五一
〃	二十年	四四、九四六	七、二五	五、五八八	二七、七三	二、九六〇	四	五、九八	九四、四四
大同 元年	〃	三八、七三六	七、六七六	三、八三四	一七、八六三	二、三四五	二	七、〇五六	六七、五〇三
〃	二年	三〇、〇三三	六、七〇四	一、七九四	八、九六二	二、三五〇	三六	九、九五九	四九、八二七
康德 元年	〃	三五、八九〇	一〇、八六一	三、四四七	七、三四五	一、三九一	六	七、二八二	六六、二二三
〃	二年	三〇、六〇七	五、六五四	二、五八六	一一、三三四	九四四	三三〇	七、一七四	四八、四九九
〃	三年	一三、一三〇	八、〇一六	三、五九七	四、六三三	一、五九九	二、八六〇	一六、〇五八	四九、八七三
〃	四年	八、六七一	八、四二五	三、一三七	三、〇七七	一、七七八	三、三七	一六、四七四	四四、八八九

安東發滿洲向發送數量

年別	區別	木材	米	紙類	薪	鹽干魚	麥粉	其他	計
民國十九年	〃	三三、一七	一三、三二	九、〇三三	一六七	一、三三五	一、一四五	六五、六八二	一一一、八四〇
〃	二十年	六、八七三	一〇、〇六八	一四、八八五	一	五五〇	一、〇〇三	三三、〇四四	五五、四二
大同 元年	〃	三六、一六三	一五、五三三	八、八九三	一、八五	一、六〇六	三、九四八	五三、〇〇四	一一〇、三三一
〃	二年	九〇、九九八	一九、六三三	八、五六三	二、五三三	二、三三六	六、六六三	一〇三、六一四	三三三、六一
康德 元年	〃	一一、三三一	一九、三四三	一一、五一一	一、三三七	二、六四五	五、五三六	一〇七、八〇六	三五一、四九六

二年	九五,四七一	一七,九六三	九,六七〇	二,三二七	二,五二七	四,七九一	七,一九五	二〇四,六三三
三年	九三,〇五一	一六,六二四	一三,七九九	一,四八〇	二,七八三	二,〇〇四	七,三〇九	三〇一,九九九
四年	一〇六,一八四	一五,三二六	二,九四八	三,五二九	三,〇五六	一,三四	一〇〇,一六三	三〇四,五〇〇

◎安東驛到着

年別	區別	綿布	綿糸	生果	生野菜	柑橘類	其他	計
民國十九年		四,四五四	四七八	一八七	七	六三〇	一,五七三	七,三八九
二十年		八八九	三三七	一五九	八	三三二	一,一三七	二,八三二
大同元年		五四五	二七六	三五八	一五	七九三	八五四	二,九七八
二年		五,四二二	一,二二三	七五三	二九	一,一六八	一,九六九	一〇,八三三
康德元年		四,〇〇七	八九三	七二	二七三	一九〇	二,一三四	八,一九六
二年		二,五六九	一,三四三	二六	三三八	六	二,一九三	六,五〇八
三年		二,九七九	一,九三二	一三九	八八	一八六	二,一三七	七,四五〇
四年		一,八七三	一,七三三	二四三	一八二	三	二,七七八	六,七七八
朝鮮發安東到着數量	木材	六,四三九	四,〇八五	三,三七六	一,一四五	一四〇	四二四	一六,四八八
民國十九年	枕木及坑木							三,〇五七

年別	區別	大豆	木材	粟	麥粉	セメント	米及糲	其他	計
二十年		一,八七三	七四三	二,四三一	五四三	四六	二七四	一三,四四五	一九,三五四
大同元年		三,七九六	三,六〇五	二,三四四	一,四一四	二四三	八五七	三三,八三九	三六,〇九七
二年		四,七五三	八,一八三	三,一七四	二,三三三	六四八	二,〇八六	四三,六〇〇	六四,七九六
康德元年		六,二九一	九,一八〇	三,五六一	二,七八八	二,三三三	八八九	四六,四三〇	七,四五三
二年		六,八九八	九,〇三五	三,三三〇	二,三〇一	三,五三八	一,七三三	三八,八二二	六五,五六六
三年		一五,五四四	三,六四六	二,九九二	二,四二九	一,八六三	一,六五七	三〇,一五三	五八,三八三
四年		二六,九五四	四,七七二	三,四五一	二,八七九	二,〇六七	一,六四五	二八,三七六	七〇,一四三
滿洲發安東到着數量	大豆	三,三六一	九,一八四	四六	五三〇	三	四,三九〇	一四一,一九一	一八八,〇四五
民國十九年		一三,七八	三,〇六六	二,〇三三	三〇七	一五〇	四,三五七	一一三,四五	一六四,九三六
二十年		一〇,七五四	八,八九九	七,〇〇六	六〇	四六	四,一四八	一三八,五八三	一五九,四九六
大同元年		四,九八八	三,三〇七	六,八八九	二四	四一	五,〇四三	一七七,〇七七	一九七,四八八
二年		六,四四四	三,五五七	一〇,六八二	二八	二四四	五,三五五	一九八,四三三	二三四,五五三
康德元年		四,七三五	七,〇九七	五,〇九三	九八五	一一三	七,一七七	二九,六四	三四五,八三三
二年		二,六〇〇	五,〇三〇	五,一五四	一一,四四〇	五,四八一	五,四八五	一八三,八三四	三三八,一〇四
三年		八,一八〇	七,五六六	五,九二七	一七,一一二	六,八五〇	五,六四九	二八〇,六〇〇	三三一,九〇四
四年									

◎安東驛通過輸入

日本發安東通過滿洲向數量

年別	區別	綿布	綿糸	綿製品	柑橘類	生果	生果	其他	計
民國十九年		九、二六	八、八三	五、七六	九	四	一、二四	一、二九	一、二九
二十一年		一、九三	三、八六	五	五	三	一、七六	四、三九	四、三九
大同元年		一、四三	六、六六	四九	三五	一〇〇	三、七九	六、三九	六、三九
二年		六、八四	一、四八	五二	一、三〇七	四七	六、四三	一七、一五	一七、一五
康德元年		一九、七九	一、九六	八六	三九	五八	七、五〇	三〇、九七	三〇、九七
二年		一七、二五	一、七八	一、三三	一八	六	七、三五	二七、六八	二七、六八
三年		三、七六	二、五二	一、三四九	一八	二	九、四八	三六、三三	三六、三三
四年		三、七九	一、九二	七〇四	一三	一九	一三、〇〇	三八、〇五	三八、〇五
朝鮮發安東通過滿洲向數量									
年別	區別	木材	砂糖	坑木	柑橘類	生果	薪	其他	計
民國十九年		三、七五	二、五四	七、三二	八	一、三四	三八	一四、六五	三八、九三
二十一年		九七	六、六〇	五、七五	一	七三	一	一〇、五七	二四、五八
大同元年		四、一三〇	五、〇七〇	三、一〇	二〇	一、四九	五、〇九	二四、二四	四三、〇九
二年		四七、八七九	一〇、五九〇	六、三五八	二、四六	五、六二九	二、七四七	五三、〇二	一三七、五八一

◎安東驛通過輸出

滿洲發通過日本向數量

年別	區別	絹糸	小豆	其他	計				
康德元年		五、三六	四、八九	二、三〇	一〇、八八				
二年		三、三八	五、三六	六、九三	一六、八七				
三年		一〇、三九	五、八三	七、六九	二二、〇五				
四年		三、〇九	二、一三	八、三四	一三、五七				
滿洲發安東通過朝鮮向數量									
年別	區別	石炭	粟	鐵及鋼	肥料	蕎麥	玉蜀黍	其他	計
民國十九年		一四、四六	一八、六六	二、四九	一、〇五	二、〇七	三、四八	一、五五	三三、五八
二十一年		三、三五	一三、三九	八五	一	二、五七	四、三〇	三、二八	四六、〇三
康德元年		三三	三三	六〇	四八	四九	一、七五	一、三五	一、三五
二年		一八	一七	四〇	三三	五七	一、五六	一、一七	一、一七
三年		三三	三三	六〇	四八	四九	一、七五	一、三五	一、三五
四年		三三	三三	六〇	四八	四九	一、七五	一、三五	一、三五

年別	區別	木材	綿布	安平	豆油	鹽干魚	鹽	其他	計
大同 元年		一、五九九	一九、六三三	三、一七七	六三七	二、四八四	四、三三〇	三五〇、三〇五	五五四、〇一四
〃 二年		三三	一九、二七七	二、七三三	一、六五〇	一、七〇	一三、〇八〇	三六〇、五四四	五〇七、〇六六
康德 元年		六一	一六、三〇三	六、二四〇	二、一〇〇	三、三三九	一、三三〇	四四三、〇五四	六三三、三三六
〃 二年		二四七	七、七三一	七、三三三	二、一三〇	六、八七七	三、〇三〇	四九三、六三五	五九〇、九六三
〃 三年		三、五九九	二九、八八五	一四、九七九	三、七五六	一〇、四四四	五、四三〇	四八、四四三	三〇五、四九五
〃 四年		三〇七、〇六一	七、一八〇	二九、三三八	七、一七〇	五、〇三一	四、五六〇	一七五、八九〇	六〇一、三二一
◎沙河鎮發送貨物數量									
年別	區別	木材	綿布	安平	豆油	鹽干魚	鹽	其他	計
民國十九年		六、五七五	四、八七七	八五九	四、六八三	七五四	三、一七〇	一七、〇一〇	三七、九三七
〃 二十年		二、一〇三	二、六四一	三三一	三、四〇〇	五五五	三、〇六六	一三、八四〇	三二、八五五
大同 元年		四、三三八	一、四三三	六六六	一、五七五	六三三	八四三	九、三三三	一八、六九〇
〃 二年		一三、六四一	四、一三九	一、〇六三	三、八八〇	一、二四三	八八六	一三、三六九	三七、一一〇
康德 元年		一三、七七一	三、八〇八	七六九	二、一七四	一、三九六	一、〇八三	一三、一九三	三四、六四九
〃 二年		一五、七三三	三、〇四三	七四一	二、六四四	一、六三三	一、八六三	一五、五一九	四一、三〇四
〃 三年		一四、五三〇	四、六五四	一、一五六	二、三〇六	二、一〇〇	一、五四七	一三、九六六	四〇、〇九九
〃 四年		六、六三三	四、二八九	二、七一九	九三六	一、三三八	二〇九	一七、五九九	三三、五九三

沙河鎮到着貨物數量

年別	區別	石炭	大豆	玉蜀黍	粟	藟	高粱	其他	計
民國十九年		四、三六六	三、五七七	八、七九三	一〇、三八〇	七、九六	三、五三九	三〇、〇一六	八五、八七七
〃 二十年		八、九三六	三四、五二四	四、三〇七	一〇、九九七	二、〇八二	四、三四三	七五、四三九	一四〇、四〇八
大同 元年		八、三三八	三三、〇三七	四、八三三	九、八〇五	二、六九〇	六、〇四七	六〇、七三四	一四四、四七四
〃 二年		五、二八四	一八、三二四	五、五三三	八、四二二	二、六〇	五、三五〇	六五、三三五	一四〇、七三八
康德 元年		四、三三三	三〇、〇〇五	六、七四九	五、六〇三	二、〇四	四、三四	六四、〇八六	一七、〇九三
〃 二年		三、八三一	三〇、一〇五	一八、八九七	四、七八六	二、四四〇	三、四八九	五七、二九八	一一〇、八三六
〃 三年		八七三	二九、四三四	一四、一四六	四、三三三	三、五四四	四、〇九三	八三、九四一	一四〇、三三三
〃 四年		四八、三〇五	一九、〇一五	一〇、八四五	三、四四二	三、八八六	三、三五三	三六、六九五	一三四、四四一

(2)海路

安東港は各期四ヶ月の結氷によつてその利用價值を半減されてゐるがこれが對策として多年安東市民待望の多獅島鐵道連繫による多獅島港の利用によつてこの不利不便は除去され國際的港として水運方面への飛躍も近き將來にあるのである。元來海路による日滿貿易を見るに冬期は朝鮮鎮南浦陸揚げ又は積込みを余儀なくされてゐたのであるが今後この方面の經路に變革を來し從來の不便も解消されることと思はれる。又南支方面との關係をみるに滿洲事變前迄は所謂南支貿易の要地として可成股眼を呈してゐたが事變後該方面との貿易漸く衰退するに及んでこれに代つて現在では山東、天津方面及び日鮮方面との海路交通要地として更生してゐる。尙安東として觀過出來ないものに鴨綠江水運利用がある從來鴨綠江水運は安東經濟界の生命線

とも云ふべくこの河川によつて安東の蒙つた恩恵は又絶大なものがある。特に上流方面との運輸交通は今尙依然としてこの鴨綠江に俟つものが多い。

◎安東港出入船舶數

船籍國別	康徳二年		全三年		全四年	
	出港	入港	出港	入港	出港	入港
關東州	一九隻	一四隻	二四隻	二七隻	二五隻	二〇隻
日本	一四隻	一七隻	六	九	五	八
中華民國	二〇〇	一七	一五	一四	五〇	四一
英國	五七	三	四	六	六	九
滿洲國	七	一	一	一	三	四
其他	一	一	一	一	一	一
計	四八	三六	三三	三八	一〇	一九
戎克	一、〇〇	一、〇〇	七四	七五	一	一
帆船	一一	一〇	一八	一四	一	一
計	一、一一	一、一〇	八三	八六	一	一

(3)背後地との交通運輸

安東の背後地たる東邊道方面との運輸交通は從來運賃關係或は交通路の不完備のため鴨綠江のみが専ら利用されて居り一ヶ

年平均約六千萬圓の多額に上る取引があつたが最近に至り該地方の交通路漸く開拓され且つ治安の確立も伴つてこれら運輸経路にも多少の變革を來しつゝある。すでに安東を中心として北に寬甸桓仁線、東に長甸河口線、南に大孤山、大連線の各自動車交通網完備して之等の地方との運交に何等不自由不便なく、加之東邊道資源の開発に重大使命を有する東邊道縦貫鐵道も着工されてゐる現在、安東を中心とする交通網は全く四通八達の文字を以つて表現するも吝かでないと思はれる。

五、貿易

(1)概況

安東に於ける外國貿易の消長をみるに開放前は特記する程の事項もなかつたのであるが開放後は漸次貿易港としての眞價を揚げ、安奉線の改修、鴨綠江鐵橋の架設等によつて日鮮滿陸路貿易にも一大拍車をかけ加之民國二年(大正二年)五月には日支兩國間に陸接國境三分の一減税の取極めが成立し安東の對外貿易は他地に比して非常に有利な立場に置かれるに至つた。其の後民國十九年(昭和五年)に至る間右の特例が存続したるためその間日滿貿易は頗る密接となり安東貿易の最も華かな時代であつた。然るに民國十九年(昭和五年)九月日支關稅協定によつてこの陸接減税の特例が撤廢となるや安東は非常に不利な立場に置かれ、加之支那側は翌民國二十年(昭和六年)一月關稅自主權に基き國產品獎勵、産業保護の名目下に關稅の大改正を斷行し、以て外貨排斥、特に日本商品の支那市場よりの驅逐を計つたため日本商品は全く滿洲進出を拒封され従つて安東稅關の外國貿易も當然衰微するに至つた。

然るにその後間もなく滿洲事變勃發するに及んでこれを契機として滿洲は南北支方面との領土的關係を離脱し獨立國として中華民國に對應するに及んで從來の南北支貿易適用の轉口稅制を廢し一外國品としての取扱ひをなすに至りたるため該方面と

安東との貿易は漸次衰退しこれに代つて日本商品の滿洲進出目覺しく特に日滿經濟提携によつて益々その緊密度を増し往年の陸接減稅時代の殷盛を彷彿さすものがあるやうになつて來た。

次に外國貿易に最も關係の深いものは關稅であるが滿洲事變以來現在迄に滿洲は三回の關稅改正を斷行しゐる。即ち第一回は大同二年(昭和八年)七月二十三日、第二回は康德元年(昭和九年)十一月二十二日、第三回は康德五年(昭和十三年)一月一日夫々改正されて來たのであるがその中第一回第二回は滿洲國建國當初の事として南京政府制定の關稅法を踏襲して僅かに稅率の改正に止つてゐたが本年一月一日の第三回改正に至つて漸く滿洲國独自の關稅法を制定し且つ稅率の大改正を斷行し滿洲國實際收支の確立を計るに至つた。

次に康德三年(昭和十一年)にはハルビン、奉天、新京に保稅倉庫の新設を見、從來の國境に於ける課稅の不便を除去し貿易業者に一大福音を齎す等滿洲國は建國早々乍ら對外貿易に非常な關心を持ちその都度改革訂正をなして來てゐる。

左に安東稅關に於ける最近の貿易額を見るに滿洲事變直後たる大同二年(昭和七年)は流石に輸出入額とも減少し總貿易額が一億圓に達しない状態であつたがその後滿洲國の治安確立、産業開發につれて漸く復活し早くも康德三年(昭和十一年)には輸入額九三、三三三圓と云ふ安東稅關開設以來嚆矢の記録を示す等着々として貿易振興を來し日滿經濟提携の現れとして益々緊密度を加へて來てゐる。

◎安東稅關輸出入貿易比較

年 例	輸 出	輸 入	合 計
民國十七年(昭和三年)	七、七四、四八國幣圓	七、五九、八三國幣圓	一五、三四、三二國幣圓
十八年(四年)	六、七五、六八	七、九一、七四	一四、六七、四二

十九年(五年)	八、四五、七〇	六八、七九、三〇六	一五二、二四五、〇八六
二十年(六年)	七、三五、六四三	四〇、三七、五三五	一一一、六三三、一六七
大同 元年(七年)	六八、四二、七五八	三五、三二、七七〇	一〇三、七五、五二八
二年(八年)	四六、三九、四八四	六一、四八、三九九	一〇七、八八、八八三
康德 元年(九年)	四五、七五、二〇三	七七、三七、六四六	一二三、一〇六、八四八
二年(十年)	三五、八九、八六九	七五、六五、三〇六	一一一、五五、一七五
三年(十一年)	四三、一六、一〇七	九三、三三、二九三	一三五、四九、四〇〇
四年(十二年)	三六、二五、九六八	五三、八四、五〇九	九〇、一〇〇、四七七

◎安東稅關主要國別輸出入貿易額

區 別	大同二年	康德元年	同 二年	同 三年	同 四年
日 本	輸出 一三、八五、一九國幣圓	一〇、六〇、五五國幣圓	一〇、一〇、四五國幣圓	八、三三、〇三國幣圓	一一、七四、〇九國幣圓
朝鮮	輸出 三三、三六、八九三	二七、三〇、八四	一九、〇九、四七九	三七、七五、四七五	二一、九六、一四二
中華民國	輸出 九、七四、五三六	六、八三、八二四	六、六九、九三五	六、〇三、八二九	四、四七、四三九
其他	輸出 四、〇七、一三三	五七、七二、一六二	五九、七二、九五六	七三、八三、一三一	三七、五七、七九
日 本	輸入 四、〇七、一三三	五七、七二、一六二	五九、七二、九五六	七三、八三、一三一	三七、五七、七九
朝鮮	輸入 一五、八七、〇六一	一六、八三、四九九	一四、三五、九三八	一六、四九、三三四	一四、四七、四三九
中華民國	輸入 四、八四、三九六	二、六四、九三五	一、三三、三九八	二、三七、五五九	一、四三、五七七

年 別	輸 入		輸 出		合 計
	輸 入	輸 出	輸 入	輸 出	
大同二年	九、五七、三〇圓	一、七九、八八圓	四、七五、〇三	三、八七、九一	一、四九、七〇
康徳元年	一三、六六、四三	二、〇四、四三	三、八四六	二、三三	五九〇、三九
〃 二年	一五、七四、〇六	一、〇五、八二	五六〇	一〇、〇九六	四三、二六、一〇七
〃 三年	一九、〇九、〇〇	一、三三、〇〇〇	八五〇	七、〇〇〇	三、三三、二九三
〃 四年	九、四四、四二	五三、一五四	一、二二六	五、七〇〇	五、八四、五〇九
合 計	六、四八、三九	七、七二、六四六	五、六五、二〇六	三、三三、二九三	五、八四、五〇九

◎最近五ヶ年安東税關關稅收入

年 別	輸 入 税	輸 出 税	沿 岸 貿 易 税	屯 稅	其 他	合 計
大同二年	九、五七、三〇圓	一、七九、八八圓	二、九九圓	三、〇七圓	一圓	一一、〇八四、三九圓
康徳元年	一三、六六、四三	二、〇四、四三	三、八四六	二、三三	一	一五、〇七六、〇九
〃 二年	一五、七四、〇六	一、〇五、八二	五六〇	一〇、〇九六	一	一六、八三三、五三三
〃 三年	一九、〇九、〇〇	一、三三、〇〇〇	八五〇	七、〇〇〇	一	三〇、四九七、八五〇
〃 四年	九、四四、四二	五三、一五四	一、二二六	五、七〇〇	一	一〇、七五九、一六八

(2) 輸 出

滿洲國の輸出商品は主として農産物、林産物等であるがその中でも殊に安東税關關係の輸出品は石炭、粟、木材、柞蠶糸、豆油、豆粕、大豆等がその主をなしてゐる。而して滿洲國は輸出獎勵の意味に於て數次の關稅改正によつて輸出品の減稅或は免稅をなし外國向輸出貿易を旺盛ならしめ最近では遠く歐米方面への積出も相當額に上つてゐる。今回の第三次關稅改正によ

つて輸出税を要する品目は僅かに二十數品に限られ逐次先進口の域に達しつゝある。

元來安東税關關係の輸出には通過物と地方物の二様があるが通過物では石炭(撫順、本溪湖)、粟(四平街附近)等がその主なるものであり地方物としては所謂安東の特産物たる木材、柞蠶糸、大豆、豆粕、豆油類が對外輸出品の王座を占めて來たのであるが最近地方物の中木材は原木難によつて往年の倂なく加之今事變以來輸出統制にて全く輸出方面は萎縮し滿洲内地への移出に更生してゐる。豆粕、豆油、大豆類も原料大豆の減收にて輸出貿易振はず剩へ從來の南支方面への輸出激減にて僅かに朝鮮北支方面に活路を需めてゐる様である。然し今後背後地方面よりの原料大豆出廻りが復活すれば相場關係にて亦々輸出も過去の股賑さに復することと思はれる。

只柞蠶糸のみは依然三大特産の一として活況を呈し化學的研究と共にその用途も益々擴大され海外輸出も今後益々増加することと思はれる。

尙最近では柞蠶屑(挽手)の利用研究によつてこれが需要額に上り日本向輸出に一大飛躍をなしてゐる。
左に主要品別輸出について示せば

品 名	仕 向 地	單 位	康徳二年			同 三 年			同 四 年		
			輸 入	輸 出	合 計	輸 入	輸 出	合 計	輸 入	輸 出	合 計
大 豆	日 本	担	二九、九四五	七、九三〇	三六、八八五	四三、八四三	一七〇、一五九	一七、六六九	一九、九八	三五、六四八	
	朝 鮮	〃	九四、八八四	一五、五一八	一一〇、四〇二	一七、六六九	五、五二	二三、一八九			
	中 國	〃	九一、三三	一八、三六八	一一〇、七〇一	一七、六六九	五、五二	二三、一八九			
	其 他	〃	一	一	二	一	一	二			
計			二一五、〇六〇	三六、八〇四	二五一、八六四	六三、八四三	二〇七、一五九	二五、〇〇〇	二三二、一五九		

石		木		柞蠶屑糸 (屑綿ヲ舍)		柞蠶糸	
炭		材					
計	其中朝日	計	其中朝日	計	其中朝日	計	其中朝日
他國	鮮本	他國	鮮本	他國	鮮本	他國	鮮本
// // // 屯		// // // 國幣圓		// // // 斤		// // // 斤	
四六三、四三三	四〇〇	四六三、四三三	四〇〇	二、〇三一、三〇六	七、七三九	一、九〇三、六九四	一一九
四六三、四三三	四〇〇	一、九四〇、四九五	四四三、七五〇	三三八、六二四	一、六九三、五六三	一四三、六九〇	一一九
四六三、四三三	四〇〇	一、九四〇、四九五	四四三、七五〇	三三八、六二四	一、六九三、五六三	一四三、六九〇	一一九
四六三、四三三	四〇〇	一、九四〇、四九五	四四三、七五〇	三三八、六二四	一、六九三、五六三	一四三、六九〇	一一九
四六三、四三三	四〇〇	一、九四〇、四九五	四四三、七五〇	三三八、六二四	一、六九三、五六三	一四三、六九〇	一一九
四六三、四三三	四〇〇	一、九四〇、四九五	四四三、七五〇	三三八、六二四	一、六九三、五六三	一四三、六九〇	一一九
四六三、四三三	四〇〇	一、九四〇、四九五	四四三、七五〇	三三八、六二四	一、六九三、五六三	一四三、六九〇	一一九
四六三、四三三	四〇〇	一、九四〇、四九五	四四三、七五〇	三三八、六二四	一、六九三、五六三	一四三、六九〇	一一九
四六三、四三三	四〇〇	一、九四〇、四九五	四四三、七五〇	三三八、六二四	一、六九三、五六三	一四三、六九〇	一一九
四六三、四三三	四〇〇	一、九四〇、四九五	四四三、七五〇	三三八、六二四	一、六九三、五六三	一四三、六九〇	一一九

豆		粟		高粱		其他ノ豆類	
粕							
計	其中朝日	計	其中朝日	計	其中朝日	計	其中朝日
他國	鮮本	他國	鮮本	他國	鮮本	他國	鮮本
// // // 担		// // // 担		// // // 担		// // // 担	
一、三三七、九六三	八六五、四八六	一、三五八、五三七	三六、五五四	三三、三三九	九七	二七三、四二一	一八六、三三三
一、三三七、九六三	八六五、四八六	一、三五八、五三七	三六、五五四	三三、三三九	九七	二七三、四二一	一八六、三三三
一、三三七、九六三	八六五、四八六	一、三五八、五三七	三六、五五四	三三、三三九	九七	二七三、四二一	一八六、三三三
一、三三七、九六三	八六五、四八六	一、三五八、五三七	三六、五五四	三三、三三九	九七	二七三、四二一	一八六、三三三
一、三三七、九六三	八六五、四八六	一、三五八、五三七	三六、五五四	三三、三三九	九七	二七三、四二一	一八六、三三三
一、三三七、九六三	八六五、四八六	一、三五八、五三七	三六、五五四	三三、三三九	九七	二七三、四二一	一八六、三三三
一、三三七、九六三	八六五、四八六	一、三五八、五三七	三六、五五四	三三、三三九	九七	二七三、四二一	一八六、三三三
一、三三七、九六三	八六五、四八六	一、三五八、五三七	三六、五五四	三三、三三九	九七	二七三、四二一	一八六、三三三
一、三三七、九六三	八六五、四八六	一、三五八、五三七	三六、五五四	三三、三三九	九七	二七三、四二一	一八六、三三三
一、三三七、九六三	八六五、四八六	一、三五八、五三七	三六、五五四	三三、三三九	九七	二七三、四二一	一八六、三三三

安東よりの移出品の貿易地であり又商工都市である。

次に安東と背後地東邊道との貿易額を示せば (康徳四年度)

◎月別發着地別數量

▽上 航 (仕向地別)

月別	仕向地											
	長	白	臨	江	輯	安	寬	甸	旬	桓	仁	合
四月	1	1	55,159	1,307,948	562,733	1,608,663	803,711	2,825,156	1,500,007	754,351	1	1,928,633
五月	1	1	1,683,331	1,859,187	1,608,663	1,859,187	2,825,156	1,500,007	754,351	1	5,311,766	
六月	1	1	1,100,555	1,499,823	1,499,823	1,499,823	2,388,338	1,500,007	754,351	1	5,755,766	
七月	1	1	731,499	1,639,525	509,360	1,639,525	791,007	1,769,637	791,007	1	2,044,384	
八月	1	1	2,277,293	1,977,928	1,639,525	1,977,928	5,340,490	1,769,637	465,283	1	5,755,766	
九月	1	1	1,633,183	1,977,928	1,977,928	1,977,928	2,363,848	5,340,490	465,283	1	9,356,883	
十月	1	1	400,000	1,977,928	1,977,928	1,977,928	2,363,848	5,340,490	465,283	1	2,433,746	
合計	9,751	9,751	9,355,777	9,577,104	17,731,194	1,229,633	37,804,459					

▽下 航 (仕出地別)

月別	仕出地											
	長	白	臨	江	輯	安	寬	甸	旬	桓	仁	合
四月	1	1	189	7,182	20,433	7,182	18,033	163,760	28,876	4,087	188,370	
五月	1	1	9,331	33,174	1,639,525	33,174	29,880	337,217	7,199	1	68,524	
六月	1	1	253,287	203,685	203,685	203,685	240,354	240,354	1	1	66,326	
七月	1	1	100,498	77,722	77,722	77,722	300,017	300,017	1	1	66,893	
八月	1	1	40,339	77,655	77,655	77,655	129,945	129,945	185,557	43,633	43,438	
九月	1	1	53,538	97,698	97,698	97,698	459,286	459,286	1	1	609,533	
十月	1	1	146,543	76,505	76,505	76,505	973,353	973,353	1	1	1,196,300	

合計	十一月	
	數量石	數量斤
數量石	1	1
數量斤	178,530	2,194
	85,866	9,567
	1,644,550	23,666
	103,779	1
	370,703	1
	2,493,633	2,834
	101,274	1,843,977
	2,033,611	2,355,123
	7,033,030	33,595

◎月別貨物別數量

▽上 航

類別	月別	
	四月	五月
雜貨	1,234,464斤	2,355,744
面粉	245,580斤	930,197
煤油	335,990斤	480,338
洋煙	18,280斤	78,279
大鹽	1,24,308斤	1,31,000
雜穀	1,98,633	5,632,766
計	2,243,746	5,755,766
雜貨	1,234,464斤	1,733,877
面粉	245,580斤	877,736
煤油	335,990斤	230,330
洋煙	18,280斤	63,506
大鹽	1,24,308斤	2,674,400
雜穀	1,98,633	226,097
計	2,380,550	4,888,675
雜貨	1,234,464斤	1,093,366
面粉	245,580斤	697,180
煤油	335,990斤	458,030
洋煙	18,280斤	46,790
大鹽	1,24,308斤	2,063,930
雜穀	1,98,633	174,504
計	2,044,384	5,158,018
雜貨	1,234,464斤	3,129,733
面粉	245,580斤	774,374
煤油	335,990斤	1,381,180
洋煙	18,280斤	146,454
大鹽	1,24,308斤	3,632,000
雜穀	1,98,633	70,896
計	2,754,677	9,356,883
雜貨	1,234,464斤	6,247,063
面粉	245,580斤	1,933,480
煤油	335,990斤	1,643,300
洋煙	18,280斤	185,518
大鹽	1,24,308斤	533,000
雜穀	1,98,633	53,602
計	2,433,746	10,582,333
雜貨	1,234,464斤	1,935,264
面粉	245,580斤	642,897
煤油	335,990斤	3,171,988
洋煙	18,280斤	580,067
大鹽	1,24,308斤	6,931,930
雜穀	1,98,633	1,582,333
計	3,780,459	19,235,264

▽下 航

類別	月別	
	四月	五月
大豆	45,433石	43,301
雜穀	8,025石	13,438
豆粕	8石	11,885
山貨	18,270斤	540,422
計	71,736	78,654
大豆	39,991	43,301
雜穀	9,760	13,438
豆粕	9,576	11,885
山貨	696,326	540,422
計	593,377	68,544
大豆	59,165	43,301
雜穀	11,733	13,438
豆粕	26,004	11,885
山貨	1,183,751	1,183,751
計	76,893	76,893
大豆	43,910	43,301
雜穀	19,127	13,438
豆粕	14,401	11,885
山貨	433,436	433,436
計	76,893	76,893
大豆	7,356	7,356
雜穀	7,387	7,387
豆粕	2,855	2,855
山貨	609,533	609,533
計	17,598	17,598
大豆	359,359	359,359
雜穀	347,878	347,878
豆粕	6,635	6,635
山貨	1,196,300	1,196,300
計	333,555	333,555
大豆	13,355	13,355
雜穀	19,307	19,307
豆粕	1,133	1,133
山貨	2,355,123	2,355,123
計	666,005	666,005
大豆	256,137	256,137
雜穀	336,555	336,555
豆粕	73,343	73,343
山貨	7,033,030	7,033,030
計	7,033,030	7,033,030

(5) 戒克貿易

滿洲、支那には古くより戒克貿易なるものが盛行はれてゐる。これは近海、沿岸を戒克によつて貿易するものであつて安東も早くより南支、北支沿岸地方とこの戒克貿易を行つてゐる。戒克貿易は運賃の低廉なる点と船大に比して積込量が比較的大であり吃水の浅いため沿岸貿易に寵せられてゐる。

左に康徳三四年の戒克貿易額を示せば

三 年 三、三八、四八圓
四 年 三、八六、一三五

輸 移 入

輸移出

四、六二、七七圓

五、二〇、一四五

三〇

六、通信

安東に於ける通信機關としては安東郵政局、滿洲電信電話株式會社安東電報電話局、同安東放送局等があり通信網の整備は安東經濟界の側面的補助機關として益する所甚大である。而して右の滿洲電信電話株式會社は郵政局より分離して電信電話事業會社として獨立してゐる点日本内地のそれと異つてゐる。

(1) 安東放送局

創立

康德四年十月廿日

周波數

八〇五キロサイクル

電力量

五〇ワット

(2) 郵政局

康德四年十二月一日滿鐵附屬地行政權移讓と共に從來の關東局より滿洲國交通部の管轄に移り遞信事務を掌つてゐる。現在市内に四郵政局がある。

(3) 安東電報電話局

大同二年九月滿洲國に滿洲電信電話株式會社が設立され電信電話事務を開始するに當り各主要都市に局を設けてこれが連絡整備に當らしめ從來の郵便局より分離して獨立事業をなすに至つたものである。

七、商業

(1) 日商概況

日本商人の安東來住は多く開放後であつて當時は一盛一衰の状態であつたが其の後安奉線の改修、鴨綠江鐵橋の架設等によつて日滿交通の要衝となるや日滿間最短時間の地理的優恵により漸く安東の經濟的立場を認められるに至り漸次商工都市としての價値を向上せしめるに至つた。

其の後歐洲大戰による經濟界の活況によつて安東もこの恩恵に浴し確固たる地盤を築き國境貿易地帯として又滿洲國內への中繼地として商工業の盛況を見るに至つた。然るに世界大戰の終末後に至り世界的不況の余波或は滿洲軍閥の壓迫等の惡材料に日商の疲弊困憊甚しく商工界の不振時代を現出した。其の後滿洲事變勃發するや稍々持ち戻し加ふるに滿洲國獨立によつて南支方面との取引に代つて日滿經濟プロツクに基く日滿貿易の股脈は全く滿洲市場に於ける獨壇場の感を呈し日商又漸次復活更生して來た。

元來安東に於ける日商は主として日本、朝鮮方面との取引多きため過去の日貨排斥當時は相當辛酸を嘗めたるも現在では斯くの如き惡弊も除去され且つ商圏も擴張され漸次好轉しつゝある。

(2) 滿商概況

安東に於ける滿商は日商に比して歴史も古く安東港開放前すでに可成の商圏地盤を有して彼等獨特の商才商法を以て現在の隆盛を見るに至つたものである。

開放前は人口も少く従つて商取引も極く微々たるもので僅かに對岸朝鮮側との互換取引或は山東方面の小額なる貿易に過ぎなかつたのであるが安東港開放後漸く貿易地として南支、日本方面との取引旺盛となり當地滿商もよく商機を把握して逐年商圏を擴張し殊に鐵道沿線、背後地方面への進出振りは實に目覺しいものがあつた。その後滿洲事變によつてこれら得意先たる

該地方の購買力減退し安東の斯界も一時衰微したかの感があつたが間もなく治安確立と共に復活し日滿貿易の活潑に伴れて滿商の取引状態も倍舊の好轉振りを示し來た。

元來安東に於ける滿商は大部分山東よりの移住民であり彼等は商才に長け忍耐力強く商人としては格好の條件を有してゐる。点日商の追従出來ない處である。只文化の程度低級なるため現在の如き經濟界の變遷甚しき時期に際しては多少遲感の嫌ひはあるが取引のウマ味とも云ふべきものは滿商獨特のものであり世界に雄飛してゐる所以とも云へやう。

(3) 取引形態

滿洲事變以前の滿商の取引は南北支方面が主であり日本朝鮮方面との取引は従たるものであつたが事變後この形態は轉倒して漸次支那品に代つて日本商品が進出したるためこれが取引利便上滿商筋も大阪を初めとして神戸名古屋東京方面に駐在員、出張員を設くる等専ら日滿取引に轉向し茲に從來の取引経路に一大變革を來した。

次に當地滿商にて對内取引をするものは主として背後地たる東邊道及び鐵道沿線地方を最上の顧客として居り大部分鴨綠江及鐵道を利用してゐる様である。(トラック利用は極く最近の事である。)該地方との取引についての代金決済は大抵現金であるが、一部三十日より長くて四十日位の延取引をなすものもある。日商の取引状態を見るに從來は對岸の新義州に支店或は倉庫を設けて日本方面よりの到着品を一單新義州留めとなし必要に應じて需要量のみを安東に搬入すると云ふ方法を採用してゐた。これは關稅の關係上金利より割出した取引方法と思はれる。然るに康徳三年(昭和十一年)十二月一日より保稅輸送制實施されるや安東中繼奥地向商品に對してはこの必要なくなり従つて安東に於ける中繼取扱ひをなしてゐた商人等で新義州の支店、倉庫を閉鎖したものもある様である。

次に滿洲事變直後未だ關稅高率であり稅關の不完備當時、輸出入稅高率商品の密輸盛んに行はれ安東の市場を攪亂し正稅を

納稅して商取引をなす滿商人に大打撃を與へたことがあるが間もなく密輸防止陣の強化並に關稅引下げによつてその影を没し現在では全く市場平穩である。

(4) 滿商の經營形態

滿商の經營形態は新舊兩様に大別され錯綜してゐるが未だ舊制度による形態が大部分を占めてゐる。而して舊式商業は獨資經營と合股經營に大別され、獨資經營は日本人のそれと異なる所はないが合股經營は獨特の發達をなしてゐる。即ち二人以上のものが資金、土地、商品、勞力等を出資提供して一つの事業を共同經營する形態である。由來滿洲國人は一般に利殖觀念が非常に強く商才に長けてゐるが他に適當の利殖、貯蓄機關や投資事業がないため自然余財を商店經營に向けて來たため現在の如き形態にて發展して來たのである。

合股經營の場合資本主たる財東は單に資本を提供するのみにて直接事業には參割せず別に掌櫃と稱する經理人を選定して經營に當らしめるのである。經理人の身分には約支と應支の二様があつて前者は固定俸給により後者は利益の分配によつて營業經營をなすのが普通である。

(5) 商業機關

康徳四年十二月の行政權移讓迄は日滿別に夫々商業機關を設置して各自の利益増進を計り助長機關として利用してゐたが十二月以後これら日滿兩機關が逐次統一され日滿商人一体の商業機關が作り上げられつゝある。

左に主たる商業機關を示せば

◎ 安東商工會

康徳四年十二月滿洲國商工會法が公布され從來市内の商工會議所、總商會、各商會を合併統一して該法に基く商工會

が設立され安東市内の商工業助長機関として活躍してゐる。商工会の内容を示すと

- 一、會長 一名
- 一、副會長 三名
- 一、常務理事 二名
- 一、理事 八名
- 一、參事 四〇名
- 一、會員 二、三三〇名

◎滿洲輸入株式會社安東支店

滿洲中小商業者の振興補助機關として民國十七年(昭和三年)滿鐵々道沿線の主要都市に輸入組合を設けたが本年(昭和十三年)七月該組合を改組して滿洲輸入株式會社各支店となし引續き日滿中小商業者に利用されてゐる。

◎組合

嘗ては日滿別個に組合を結成してゐたが滿洲國同業組合法公布によつて逐次これら別個の組合を合併して市内同業者を打つて一丸とする同業組合の出現を見つゝある

左に現在の各組合を示せば (康德五年九月末現在)

名 稱	所在地	代 表 者
安東市理髮組合	大和橋通二	大 倉 久 一
安東輸出貿易商組合	江岸通八	柳 田 宗 三 郎
安東料組店組合	三番通六	横 畑 幾 久
安東旅館組合	大和橋通三	釘 崎 丑 雄
安東實業組合	三番通七	中 村 恒 三 郎

安東 糖業組合	江岸通五	足 立 長 五 郎
安東米穀商組合	市場通五	影 山 常 三 郎
安東洋服商組合	市場通三	清 水 貞 一
滿洲保險協會安東地方分會	四番通四	安 田 誠 次
安東綿糸布組合	大和橋通三	田 中 武
安東石炭商組合	江岸通八	藤 平 泰 一
安東運送業組合	北一條通四	岩 崎 卯 一
滿洲土建協會安東支部	三番通一	大 村 寬 藏
安東材木商組合	大和橋通三	伊 藤 勘 三
安東吳服商組合	五番通六	錦 織 琢
安東柞蠶商組合	大和橋通三	近 藤 松 五 郎
安東藥業組合	大和橋通八	望 月 福 太 郎
安東魚仲買人組合	四番通二	秋 岡 鹿 治
安東洗染同業組合	六番通三	崎 山 梅 吉
鴨綠江舡船業組合	江岸通四	中 原 操
安東飲食店組合	大和橋通四	光 森 勝 太 郎
安東車輪同業組合	六番通八	清 水 庄 之 助



安東雜貨同業公會	安東紙業公會	安東元酒業公會	安東銀業公會	安東木業公會	安東朝鮮菓業公會	沙河鎮運送業公會	安東油業同業公會	安東米穀業公會	安東綿織物製造業組合	安東漢藥業公會	安東雜貨同業公會
前聚寶街	迎江街	財神廟街	中富街	興東後街	興隆街	沙河鎮旭町	財神廟街	官電街	財神廟街	大和橋通九	七番通七
張孫	宋孫	方孫	馬孫	劉馬	姜趙	王王	王王	王王	王王	王王	王王
省雲	銘培	韶韶	善善	玉鳴	雁雁	銘銘	蓮蓮	新新	盛盛	荷荷	瑞瑞
三亭	賓賓	棠棠	九堂	亭亭	山山	書書	勤勤	洲洲	明明	軒軒	松松

安東紙卷煙草批發商組合	安東引打式打綿業組合	安東小麥商組合	安東土木建築組合所	安東帆船同業公會	安東雜業並古物商組合	安東山貨皮業同業公會	安東靴業同業公會	安東金銀首飾業同業公會	安東銀市	安東糧市	安東印刷業同業公會	安東炸蠶製糸業組合
〃	〃	大和橋通三	九江街	江岸通八	大和橋通九	公安街	朝鳳街	中富街	財神廟街	糧市街	財神廟街	財神廟街
福田	莊景	王玉	孫鴻	王連	渡邊	馬利	單通	趙子	彭竹	姜儒	劉干	莊景
菊次郎	景軒	玉堂	鴻慶	連文	邊正	利湘	通禮	子貴	竹坡	儒函	干善	景軒

(6)倉庫

安東市に於ける營業倉庫は滿鐵倉庫、國際運輸倉庫の二つで其の他は各商店の自家倉庫である。而して商業倉庫として一般に開放してゐるものは國際運輸倉庫の一庫であつて保管貨物の主なるものは綿糸布、セメント、砂糖、麥粉、煙草等である。

(7) 市場

現在市内には左の三市場がある、

羅織方法による卸賣市場

組織的小賣市場

非組織的市場

安東市場株式會社

安東公設市場

安東魚菜市場

安東市場株式會社は康德三年(昭和十一年)九月創立にかゝり、鮮鹽干魚、生乾野菜、果實等の卸賣市場であつて内鮮方面より商品を委託買ひをなし指定仲買人をしてこれら商品を賣捌いてゐる。現在の仲買人數は本仲買人九名、(下仲買人が別に五名)普通仲買人七名(下仲買人が別に二名)である。

左に康德四年中に於ける安東市場株式會社の羅織を示すと

魚類 二八、四八貫

三三、三九圓

野菜類 二五、三九貫

八、七八圓

果實類 四五、〇八貫

三五、七六圓

安東公設市場は民國十八年(昭和四年)十一月の創立にかゝり主として食料品の小賣業者を以て組織されてゐる現在該市場の

店舗數を示せば

肉店 五戸

魚店 一三戸

野菜、果實店 一五戸

食料雜貨店 二九戸

豆腐店 一戸

其他 三戸

計 六六戸

◎安東魚菜市場の概要を示せば

創立 民國二十年(昭和五年)五月

會員數 四六人

營業戶數 魚菜業 一八戸

牛肉業 一戸

猪肉業 四戸

康德四年 八八、〇〇圓

(8) 夜店

安東に於ける夜店は従來日商側と滿商側の二ヶ所に分れて夫々別個に開店して居り前者は従來輸入組合が斡旋し後者は舊總商會がこれに當つてゐたが本年よりは滿洲街のみは商工公會によつて斡旋取扱ひをなすことになつた。期間は滿商側は六月十五日より八月末日迄、日商側は六月一日より九月末日迄の夏期夜間中繼續するものであつて夜市營業申込者も年々その數を増し康德五年は日商側八〇、滿商側一六一の多數に上つてゐる。

八、工業

概況

滿洲事變迄は製材業、柞蠶製糸業、油房業によつてのみ安東工業界を擔つてゐた感があり又事實この三大特産工業によつて安東の工業價値を一般に紹介してゐたとも云へやう。然し未だ安東は他地に比して工業都市としての貫録を充分に具備してゐるとは云へず工業的進展は余りに遅々たる感があつた、然るに滿洲事變後經濟界の發展につれて漸次工業都市化し棉布、ゴム、清酒等の諸工業次々に勃興するに及んで漸く安東の工業界も活氣を帯びて明日の大飛躍を約束づけられるに至つた。元來安東は工業地としての條件は充分に具備してゐながら事變前は等閑に附せられて來たが事變後關稅の改正、銀貨の昂騰によつて工業條件は非常に有利に展開し且つ東邊道の豊富なる資源開發に着目され、東邊道縦貫鐵道敷設、鴨綠江水電六〇萬キロ發電等によつて安東の工業價値は益々昂まり大資本の企業も次々と具体化しつゝあり今後の安東の工業界も漸く多事ならんとし得る。左に安東に於ける主要工場の概要を示せば (康徳四年末現在)

工場	戸數	資本金
柞蠶製糸	三六戸	一四、三九〇圓
油房	一八	一、四一、四八〇
製材	一	一、〇〇〇、〇〇〇
製紙	三	七、〇〇〇、〇〇〇
ゴム	六	一、一六、〇〇〇
精米	三〇	六三九、六〇〇
醸造	二九	三二一、〇五〇

鐵工	一四七	一四一、二六〇
靴下	三〇	四、七五〇
棉布	四七	四〇五、六一〇
染色	一九	二五、一〇〇
其他	一八〇	一、五七九、七六〇
合計	五四六	三、五〇〇、〇〇〇

(註)滿洲街の工業資本は殆ど流動資本のみの發表につき總資本とは多少の差あるものとす。

次に安東の工業條件を列挙すれば

- 一、滿洲國に於て最も氣候良好なること
- 一、廣大なる工業用地を有すること
- 一、勞銀低廉なること
- 一、良質なる工業用水を有すること
- 一、近く低廉なく電力の供給あること
- 一、豊富なる資源を有する背後地を持つこと
- 一、水陸交通運輸の便なること

次に右の有利的條件によつて最近安東、新義州を打つて一丸とする鮮滿特殊工場地帯設定問題が日鮮滿各方面の關係者間に研究計劃され安東工業界に一大センセーションを巻き起してゐる。

左に安東に於ける主要工業の概要を示すと

(1) 製材業

一時は木材の安東か、安東の木材かとまで謂はれた木都安東の製材業は康徳三年(昭和十年)十二月鴨綠江製材合同株式會社に統制されるまでは市内に二十數戸の製材工場を有し各自豊富なる鴨綠江材によつて夫々斯業の振興を見せてゐたが滿洲事變以來滿洲奥地方面の復興建設による木材の需要増加にも不拘多年鴨綠江材の亂伐の結果漸次資材難に陥入り且つ上流方面に於ける匪賊跳梁による伐採困難等によつて集團伐採の止むなき状態に立入り益々原木配給不圓滑となつて來たためこれが打開策として前記鴨綠江製材合同會社の名稱の下に合併し木材界に一新規元を劃するに至つたものである。爾來奥地方面の建設熱は依然旺盛を續け木材需要も益々増加の一途を辿つて居り斯業は再び往年の活況振を呈してゐる。

◎ 安東着筏數量

鴨綠江上流の長白山脈並に支流渾江流域一帶にある滿洲側大森林の伐採、流筏は日滿合併の鴨綠江採木公司の經營にか、り安東に着筏の上原木のまゝ製材業者に販賣されてゐる。

左に着筏數量を示せば

年 別	筏 數	角 石 材	丸 石 材	合 計
大同 元年 (昭和七年)	二,三五五合	六三三,五〇七,八	四八,三七二,三〇	一,〇七一,八七九,〇八
〃 二年	一,九八一	四八一,五三六,〇七	五六,〇八六,〇五	一,〇四七,六二二,一三
康徳 元年	二,〇八五	五九七,九七六,五八	五三,三三八,九三	一,一三一,二九五,五一
〃 二年	一,九五五	六九七,七三三,三四	七〇〇,四一四,六五	一,三九八,一八七,九九

〃 三年	一,二四五	三〇六,五〇五,八五	七五九,八九五,五九	九六六,四〇一,四四
〃 四年	七六三	一三三,三〇六,七一	五三二,四九九,七六	六六五,七六,四九

◎ 安東製材工場生産高累年比較

年 別	工場數	數 量	價 額
民國十五年 (昭和元年)	二	五三一,〇七三尺締	五,九五九,一四九圓
〃 十六年	三	四一九,八八二	六,〇〇三,六七
〃 十七年	五	四三四,五五〇	不 明
〃 十八年	三	三七一,三七一	三,四一六,六〇五
〃 十九年	三〇	二三〇,六六九	二,〇〇七,二九八
〃 二十年	一九	二四一,五九五	一,六四四,七三四
大同 元年	二	三三〇,七二六	二,五七九,五九二
〃 二年	三〇	五六八,五九九	七,〇〇三,五六三
康徳 元年	一九	六九九,五〇三	六,九一五,八三〇
〃 二年	一九	六四八,〇三八	七,九四七,八六六
〃 三年	一	三三九,五八三	三,七三〇,〇〇〇
〃 四年	一	四〇〇,〇〇〇	五,一八二,〇〇〇

◎ 康徳四年中木材相場 (單位尺)

月別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
原木	一三、五〇〇	一三、〇〇〇	一三、五〇〇	一三、八五〇	一三、八五〇	一三、三五〇	一四、五五〇	一四、五五〇	一四、五五〇	一四、五五〇	一四、五五〇	一四、五五〇
製材	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇	一七、〇〇〇	一七、〇〇〇	一七、〇〇〇	一八、〇〇〇	一八、〇〇〇	一八、〇〇〇	一八、〇〇〇	一八、〇〇〇	一八、〇〇〇
原木	八、三〇〇	七、六〇〇	八、〇〇〇	八、九〇〇	八、九〇〇	九、〇〇〇	九、五〇〇	九、八〇〇	九、八〇〇	九、八〇〇	九、八〇〇	九、八〇〇
製材	一三、〇〇〇	一三、〇〇〇	一三、五〇〇	一五、五〇〇	一五、五〇〇	一七、〇〇〇	一七、〇〇〇	一七、〇〇〇	一七、〇〇〇	一七、〇〇〇	一七、〇〇〇	一七、〇〇〇
原木	八、三〇〇	七、六〇〇	八、〇〇〇	八、九〇〇	八、九〇〇	九、〇〇〇	九、五〇〇	九、八〇〇	九、八〇〇	九、八〇〇	九、八〇〇	九、八〇〇
製材	一三、〇〇〇	一三、〇〇〇	一三、五〇〇	一五、五〇〇	一五、五〇〇	一七、〇〇〇	一七、〇〇〇	一七、〇〇〇	一七、〇〇〇	一七、〇〇〇	一七、〇〇〇	一七、〇〇〇

◎鴨綠江製材株式會社の概要
 名 稱 鴨綠江製材合同株式會社

所在地 安東市南三條通五丁目
 資本金 一、〇〇〇、〇〇〇圓
 代表者 八 木 元 八

工場の概要を示すと

工場名	第一工場		第二工場		第三工場		第四工場		合計	
	種類	馬力	種類	馬力	種類	馬力	種類	馬力	種類	馬力
動力	蒸電力	四二五	蒸電力	五七一	電力	五〇五	蒸電力	一五〇	蒸電力	一、五三三
機械	製函	三七	製函	一〇	製函	五	製函	五	製函	五七
臺	堅鋸	五	堅鋸	八	堅鋸	四	堅鋸	三	堅鋸	二〇
數	帶鋸	一八	帶鋸	一六	帶鋸	一三	帶鋸	七	帶鋸	五三
	圓鋸	一八	圓鋸	一九	圓鋸	一三	圓鋸	七	圓鋸	五三
	目立其他	一三	目立其他	一四	目立其他	一〇	目立其他	五	目立其他	四三
計	計	一三	計	一四	計	一〇	計	一	計	一三九
從業員	內地人	一四	內地人	八	內地人	六	內地人	六	內地人	三四
數	朝鮮人	一	朝鮮人	二	朝鮮人	三	朝鮮人	二	朝鮮人	七
	滿洲人	五〇〇	滿洲人	三〇〇	滿洲人	二五〇	滿洲人	一五〇	滿洲人	一、三〇〇
計	計	五一四	計	三二〇	計	三五九	計	一五八	計	一、三四一
一日ノ製材能力	立方尺	一〇、〇〇〇	立方尺	八、〇〇〇	立方尺	八、〇〇〇	立方尺	四、〇〇〇	立方尺	三〇、〇〇〇
生産量	立方尺	4,800,000								
價格	圓	5.182,000								

②油房業
 朝鮮日本方面の農村の肥料として安東生産の豆粕は可成古くから該地に輸出され好評を博してゐたものである。抑々安東が

豆粕、豆油の生産地として工業界に名を出したる原因は背後地に豊富なる原料大豆の産出がありこの原料大豆の出廻りによつて安東油房業を振興せしめたからである。次に安東に於ける原料大豆の出廻経路に三様あつて川利用、汽車利用、馬車利用がそれである。右の内川利用の所謂川物大豆の出廻りは最も多く鴨綠江の水運を利用して低廉なる運賃を以て廻着が出来るため業者も毎年解氷期と同時に現物の取引を開始することになつてゐる。

而して例年これら三経路によつて廻着する原料大豆の數量の如何は油房界に多大の影響を與へ、時としては直接安東經濟界の振不振のパロメーターとなつたこともある位である。而るに滿洲事變後背後地の匪害、天災等に禍されて大豆の收穫激減し加之硫安の進出も手傳つて油房界の不振を來し相場高のため大連積出しものに押されがち状態に立入つてゐる。

次に工場方面を見るに滿洲事變前斯業の盛況時代は二十數戸の工場を有し製品は夫々朝鮮、日本、南北支に輸出されてゐたが事變後の惡材料に禍されて業績振はず現在では日人經營一戸滿人經營十四戸となり引續き原料大豆不足 相場高、運賃高等のため市況は不振状態を脱せず依然操短休業をなしてゐるものもある。

左に大豆の出廻數量並に油房概要を示せば

◎大豆出廻數量 (單位噸)

年 別	川 物	汽 車 物	馬 車 物	合 計
民國十七年 (昭和三年)	九、三二	三、七三三	五、三四九	一三八、二九四
十八年	九、五八八	四、二九四	二、八五六	一四三、七三八
十九年	一〇、五七七	四、五三三	三、三七五	一四八、四五五
三十年	一五、二九七	五、一〇三	四、〇一一	二二、四一一

大同 元年	一三八、四七三	二八、三〇八	五、一九五	一七一、八七五
二年	一〇四、四五一	三三、四九八	二、四六五	一三〇、四一四
康德 元年	一一、九四三	三四、八六八	四、〇三八	一五〇、八四八
二年	六三、四八六	三四、一〇六	二、三七六	八八、九六八
三年	二二、四六五	三九、一七九	二、四四四	六三、〇八八
四年	一九、一九一	三五、〇三〇	四、四二〇	四八、六三一

◎安東豆粕豆油生産數量

年 別	豆粕生産高	豆油生産高	大豆消費高
民國十七年 (昭和三年)	四、一四、〇八〇枚	一八、七四三、六九日本斤	一三三、〇四五噸
十八年	三、九四三、六八〇	一七、〇五七、八三	一二〇、三九一
十九年	四、〇四二、五〇〇	一八、一四八、五八五	一二七、八八六
二十年	五、二九、三九七	三三、七四八、三五	一六一、四〇三
大同 元年	四、五八五、二二三	三〇、八六三、七九	一四三、三四一
二年	三、四五六、七〇三	一七、三三三、五二〇	一一〇、〇三三
康德 元年	四、〇四二、一七九	一八、三九一、九二四	一二九、九三二
二年	二、四八〇、八六五	一一、九六五、二二	六三、六〇七
三年	一、五三八、三六七	七、六九一、八三五	四六、五六六

◎豆粕豆油輸出數量

年別	日本向	朝鮮向	中華民國向	其他	合計
四年	一、二四、六八		五、六〇、〇〇	三六、四五四	四八
大同二年	四四、七四	三六八、〇〇六	一、一六、五三三		一、九九、三四三
康德元年	四八、六六三	七六五、五二七	九九九、八〇九		二、一八三、九八八
二年	三六、五五四	四〇五、九三三	八六五、四八六		一、三〇七、九六二
三年	四六、〇九八	三四、三三九	五〇〇、三五九		八五〇、七九六
四年	一六二、六六二	一八三、六八二	二八四、五六二		六三〇、九一六
豆油 (單位担)					
大同二年	一	五	一七、八三三		一七、八八九
康德元年	一	二六四	一三二、一八四		一三三、四八八
二年	二	三、四一五	五四、五五七		五七、九七四
三年	一	四七三	一三、八二六		一四、二八八
四年	七	六六五	七四		七四六

◎最近油房三品の月別相場を示せば

年別	月別											
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
大豆	四、七	四、六六	四、五六	四、三四	四、三〇	四、四三	四、五三	四、三七	四、三五	三、八四	三、八八	四、七六
康德元年	三、六四	三、七〇	三、四九	三、二六	三、二六	三、二一	三、四〇	四、〇五	三、八六	三、七六	三、七五	四、七七
二年	五、〇九	五、七九	五、七〇	五、八一	五、七九	四、七八	四、七五	四、五九	四、九二	五、五九	五、三五	五、三五
三年	五、五二	五、五二	五、五四	六、一四	六、一七	六、六〇	六、九六	八、二〇	八、二八	六、九七	五、六九	七、八三
四年	五、三九	五、三二	五、七三	五、三八	五、一七	四、九九	五、〇〇	四、五七	四、四八	四、六〇	四、七〇	四、七三
大同二年	一、六三三	一、	一、五二一	一、五二一	一、五三三	一、六四四	一、六四五	一、五四一	一、四五五	一、三九七	一、三八八	一、一九三
康德元年	一、一九八	一、二八六	一、三三四	一、三三八	一、三四五	一、三〇七	一、二六五	一、三三九	一、四三一	一、四七五	一、三三六	一、四九三
二年	一、六〇二	一、八九八	一、八四四	一、九〇八	一、九六九	一、六九五	一、七〇一	一、六三一	一、七六〇	一、八四五	一、六八三	一、六九三
三年	一、八三二	一、七六六	一、七八〇	一、九〇〇	二、〇〇〇	二、一三〇	二、三三〇	二、三八六	二、四五〇	一、九七三	一、七五三	二、〇六六
四年	二、一七〇	二、三三五	二、三〇一	二、三〇四	二、三三三	二、二四九	二、二六三	二、三〇六	二、〇七四	二、一三七	二、〇九七	二、一三三
豆粕	一、三、五五	一、三、八三	一、三、三七	一、三、三〇	一、三、八二	一、三、八九	一、四、六三	一、四、七〇	一、四、一九	一、三、四八	一、三、〇九	一、〇、七六
昭和八年	一〇、六三	一	九、〇八	八、三五	九、〇六	八、八一	九、三九	一三、六四	一〇、五四	一〇、三六	一一、〇三	一五、三五
九年	一六、五二	一九、八三	一八、六三	一八、一八	一七、八九	一三、八八	一三、七七	一四、三八	一五、六九	一八、三三	一八、三九	一八、九〇
十年	一九、五四	一八、七四	一八、六六	二一、三三	二一、四三	二三、九五	二四、八〇	二二、三三	一九、七六	一九、六六	一八、四三	二三、四八
十一年	二一、〇四	二〇、七三	二〇、七五	二一、〇一	二〇、三三	一八、七五	一八、三三	一七、六九	一五、八一	一六、六三	一五、三六	一四、〇〇
十二年	二一、〇四	二〇、七三	二〇、七五	二一、〇一	二〇、三三	一八、七五	一八、三三	一七、六九	一五、八一	一六、六三	一五、三六	一四、〇〇
豆油	一、三、五五	一、三、八三	一、三、三七	一、三、三〇	一、三、八二	一、三、八九	一、四、六三	一、四、七〇	一、四、一九	一、三、四八	一、三、〇九	一、〇、七六

(備考) 大豆百斤豆粕一枚豆油百斤建トス

◎油房工場一覽表 (康德四年度)

油房名	所在地	資本金	機械台數 (榨油機)	康德四年生產高 豆粕
雙合棧	前聚寶街	四七,五〇〇圓	八〇台	九六三,二九斤 一六〇,五〇枚
與盛棧	興隆街	四八,〇〇〇	七	三七三,九四七 七,九五五
雙合義	前聚寶街	四〇,〇〇〇	七	四一七,六〇九 七一,七五五
廣泰油房	縣前街	二八,〇〇〇	七	三六五,〇三四 六三,六三五
恒盛泰	天后宮街	一九,五〇〇	八	二六八,二〇五 四六,九七〇
豐裕同	前聚寶街	三〇,〇〇〇	六	八八三,二六〇 一五〇,七〇〇
同聚東	官電街	四〇,〇〇〇	六	七二,七七〇 二,六八八
玉順同	〃	四一,六三五	〇	〃
福增順	興東街	四四,〇〇〇	八	〃
德聚昌	通仁街	四三,八〇〇	六	七〇三,四六〇 一一,九三六

東泰恒	〃	四〇,〇〇〇	四	一〇九,三四八 一八,五四三
和興益	前聚寶街	三三,〇〇〇	七	七八三,五六三 一三,〇九五
玉合隆	俊聚寶街	二〇,〇〇〇	七	五三〇,四三一 八七,〇四五
同順油房	〃	三〇,〇〇〇	六	〃
永遠油房	興東街	二〇,〇〇〇	六	二九五,七四九 五四,八五五
吉昌永	前聚寶街	二〇,〇〇〇	六	二〇,五〇七 四,一四〇
天增順	公安街	九,〇〇〇	七	一五三,四〇四 二七,三三五
東和順油房	後聚寶街	五,〇〇〇	七	〃
同興福	通仁街	四四,〇〇〇	四	一四七,四一八 二六,六三〇
陞記油房	江岸通	三〇〇,〇〇〇	八	八八七,七二三 一七九,九九四
合計		九三三,四三五	一,三四一	六,九六三,六九五 一,二二九,七七五

(3) 柞蠶製糸業

安東に於いて世界的商品として海外に飛躍してゐるものはこの柞蠶糸である。柞蠶は元來滿洲、支那が發生地であるが殊に安東は柞蠶に關する限り全滿第一の工業地であり生産地でもある。地理的に見ても他地に比して氣候、地勢最も柞蠶飼育に適してゐる關係と古くより安東を中心として斯業の發達を見たのである。

製糸は主として日本、南支方面に輸出されて居り最近では挽手(屑糸)も化學的研究の結果その用途の有望性を認められ遠く亞米利加邊り迄も輸出される様になつて來てゐる。近來の如く綿毛の節約、統制の時機に際して柞蠶糸の用途には益々希望をかけられ柞蠶糸の増産改良は目下の急務として滿洲國政府でも柞蠶糸検査を國營となし又は輸出税を無税とする等積極的に之が助成に乗出して來てゐる状態である。

只現在の柞蠶工場は殆んどが舊式の手繰式であるため今後これが機械化され品質の改良が研究實用化するならば柞蠶界の活況は期して俟つべきものがある。

左に柞蠶工場の概要を示せば (康徳四年末)

工場名	所在地	資本金	機械台數	康徳四年生産量
東泰糸廠	天后宮街	10,000圓	二七五台	二八四、〇箱
東合盛	九道溝	10,000	二二	二八六、〇
同順糸廠	天后宮街	10,000	三五	三三三、〇
乾元糸廠	鎮山路	七、〇〇〇	二五〇	二四七、〇
和豐益	二緯路	三、五〇〇	一五〇	二六、〇

義昌東	和經路	七、一〇〇	三五	三〇〇、〇
義泰祥	太平胡同	一四、〇〇〇	二五〇	一八一、〇
德生糸廠	鎮安路	六、〇〇〇	三五	二九五、五
順泰興糸廠	和經路	五、五〇〇	一五〇	一三八、五
恒興德	中寶街	二〇、〇〇〇	一〇〇	五三、〇
同利永	和經路	一、五〇〇	三五	一九七、二
昌記糸廠	天后宮街	一〇、〇〇〇	三五〇	三五〇、〇
遠東糸廠	中寶街	二、〇〇〇	二〇〇	一四九、九
同源糸廠	中寶街	六、〇〇〇	二五〇	二二四、二
源生隆糸廠	鎮山路	二、五〇〇	二〇〇	一九五、五
恒裕糸廠	太平胡同	一、三九〇	二〇〇	一六三、〇
七星糸廠	鎮安路	九、〇〇〇	二五〇	二〇五、〇
生記糸廠	鎮安路	二、〇〇〇	三四七	三三三、〇
正昌糸廠	和經路	一、〇〇〇	一三五	九三、〇
和順號	和經路	三、五〇〇	二〇〇	一五八、一
東順糸廠	天后宮街	一、〇〇〇	一四	一四三、五
泰和糸廠	天后宮街	三、〇〇〇	三四八	一九九、五

廠名	所在地	肩糸 (挽手)	額
安大糸廠	鎮安路	二,〇〇〇	三三,〇〇〇
仁昌糸廠	九道溝	七,五〇〇	一四,〇〇〇
和順徳糸廠	天后宮街	二,〇〇〇	一四九,五〇〇
元記糸廠	太平胡同	三,〇〇〇	一八六,〇〇〇
久豊糸廠	和經路	一,〇〇〇	一四,〇〇〇
新大糸廠	平安街	二,〇〇〇	一四三,〇〇〇
同和糸廠	中寶街	二,〇〇〇	一〇八,五〇〇
元生泰糸廠	鎮安路	一,五〇〇	八三,〇〇〇
天成糸廠	〃	五,〇〇〇	一六九,〇〇〇
益和糸廠	〃	一五,〇〇〇	二四四,五〇〇
義昌號	九道溝	三,〇〇〇	一三六,五〇〇
永興糸廠	和經路	二,〇〇〇	七八,五〇〇
和順興	鎮安路	一,五〇〇	七〇,六〇〇
乾順昌	〃	三,〇〇〇	一〇五,〇〇〇
雙合糸廠	鎮山路	二,〇〇〇	五一,九〇〇
合計	三十七戸	一〇七,五〇〇	六,三五四,九〇〇

◎最近五ヶ年の柞蠶糸生産高

年別	柞蠶糸	肩糸 (挽手)
大同二年	七,三九箱	五七,二三斤
康徳元年	五,六四三	四〇八,四三五
〃 二年	五,五二三	四六八,八五六
〃 三年	四,四三六	三九四,七五六
〃 四年	六,三五四,九	五七二,〇四二

(註) (一箱舊百斤入)

次に柞蠶糸生産の場合副産物として肩糸を生ずるがこの肩糸が所謂挽手(ワレシユ)であつてこれを原料として瓦斯紡績糸を製してゐる。當安東にある富士瓦斯紡績安東工場がこれである。該工場は全滿唯一の柞蠶瓦斯紡績工場であつて製品は遠く印度南洋、米國方面に迄輸出されてゐる。

次に最近では日本内地方面にて挽手を羊毛、ステールファイバー等に混織し又は製綿用として盛んに使用されるため挽手の需要頓に旺盛となり製糸と共にその用途は益々重大性を帯びて來てゐる。

左に富士瓦斯紡績株式會社安東工場の生要概要を示せば (康徳四年度)

製品	數量	價額
絹糸	一五〇捆(一捆十四貫四百匁)	六四,〇〇〇圓
紬糸	八〇俵(一俵二十四貫)	三六,八〇〇圓
製綿	五,〇〇〇貫(内二千貫ハ絹糸製造ニ使用)	六〇,〇〇〇圓

◎康徳四年中柞蠶糸月別相場 (單位百斤)

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
灰糸一等	三八〇圓	三五〇圓	三五〇圓	三五〇圓	三七〇圓	三八〇圓	三八〇圓	三九〇圓	三六〇圓	三六〇圓	三三〇圓	三三〇圓
柞蠶糸 緯糸	二五	二八〇	二八〇	二八〇	二六五	二六五	二七五	二七五	二五〇	二五〇	二四〇	二三〇
藥水糸	—	—	四二〇	—	—	—	四三〇	—	四三五	—	—	—

(4) 棉布業

安東に於ける棉布工場は現在五十二戸あり全部滿人經營である。元來安東は棉布の輸入地として早くより日本、南支方面より多額の棉布輸入を見てゐるが、相場の關係上原料棉糸を輸入して國內織布をなし輸入棉布に對抗して可成の業績を上げてゐる。而して市内棉織物工場は原料棉糸(主として二十番手)を日本側棉糸布商より共同購入をなしてゐる。工場は足踏機によるもの一二戸、電力機を使用するもの四〇戸で製品は大巾物(三三吋)製織が主であるが若干の小巾織をなすものもある。

康徳五年一月實施の關稅改正によつて綿糸の稅率引下げは斯業の振興に多大の好影響を與へ今後の活躍が期待されてゐる。左に安東に於ける棉布工場の概要を示せば (康徳四年)

月別	戸數		織機		生産數	産額		販賣		販賣地	需用原料數	延作業日數	延職工數
	動	休	原有數	轉數		金	額	數	金				
一月	四七	—	二一、四四	—	七四、七五	五五三、三九	四九、三六	三八八、九三	—	—	一、六五三	一、三七〇	一、八五九
二月	四二	—	八一、三七	—	三六、一六	二八八、四三	三〇、九三	三五、八七	—	—	七五〇	六〇二	一、八二六

三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	合計
四六	四六	四六	四六	四七	四七	四九	四九	五〇	五三	五三
三一、五四	二一、五一	二一、五一	二一、五一	三一、六〇	三一、六〇	二一、六八	二一、六八	二一、七六	一一、七九	二八一九、三四
一、三九一	一、三八七	一、四三三	一、四三〇	一、四九八	一、五三〇	一、六〇三	一、七三八	一、七四七	一、七四五	一八、〇五三
八五、二六	九三、三七	一〇〇、五〇	八七、七六	九九、六九	八七、〇〇	九三、〇三	一二三、〇七	一一八、四六	一一五、三七	一、二一九、七〇
六七〇、七五	六八〇、五六	七五三、七七	六五三、三七	七六六、七八	六七三、二六	七〇一、八〇	九三七、九〇	九〇七、三五	八八〇、三九	八、四六五、五三
八六、四三	八六、六五	八〇、七七	七五、九四	八〇、八五	八〇、七七	二四、九三	一四、六七	二〇、三九	八八、四八	一、〇四九、〇八
六三三、二六	六四四、一七	六二二、九四	五九二、二九	六〇〇、〇五	六三七、九四	九九八、八七	一、四九、五九	九四九、八八	七五、五三	八、三六、八七
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全
一、八〇五、三七	一、九三六、三一	二、〇三九、一三	一、七四二、一八	一、九六九、三三	一、七四六、二二	一、七九一、一〇	二、三三〇、三五	二、三二八、三三	二、三八一、二五	三三、三三三、三八
一、三九〇	一、三七二	一、四〇八	一、三四八	一、三四六	一、三六一	二、二八五	一、五〇一	一、四九三	一、五七八	一五、八五三
一、九七三	二、〇二六	二、〇四二	二、〇四二	二、〇三〇	二、〇九三	二、一七〇	二、二七五	二、二七三	二、三六一	二四、九三七

次に從來製品販賣は市内及び近郊に限られてゐたが最近では逐次販路を擴張し奉天、新京、ハルピン方面にも製品を積出してゐる。

(5) 製紙業

滿洲に於て最も製紙業の盛んな安東に現在三製紙工場があり各工場共その原料、製品を異にしてゐる。即ち鴨綠江製紙株式會社は原料を鴨綠江材に需め有光紙、宣紙、毛邊紙、木質パルプ等を生産し、六合成造紙廠は鴨綠江下流に密生してゐる葦を

原料として印刷紙、模造紙、川表紙等を造り、安東造紙株式会社は麻纖維を使用して紙巻煙草の煙草紙を製造してゐる。而してこれら各工場の製品は自らその販路を異にし鴨綠江製紙は國內、天津、山東、南支方面に輸出し、六合造紙廠は國內及山東方面を販賣圏とし、安東造紙廠は主として國內煙草會社を顧客としてゐる。左に各工場の概要を示せば

◎鴨綠江製紙株式会社

所在地 安東市六道溝桃源
 代表者 牟田吉之助
 資本金 五、〇〇〇、〇〇〇圓
 設立年月 大正八年六月
 主要機械 抄紙機 五台、パルプ抄造機 一台、ダイゼスター 三基、グラインダー 一台、汽罐 六基
 康徳四年度 生産高
 ロール紙 七四、四七三封度
 有光紙 一〇、四九九、一三三封度
 宣紙 四、三五一、四三〇封度
 毛邊紙 二、三三三、六四封度
 其他 三、四八六、五七七封度
 合計 二、三三三、二六六封度
 職工數 二五四名

◎株式会社六合造紙廠

代表者 安東市中興鎮
 代表者 足立正
 資本金 一、五〇〇、〇〇〇圓
 設立年月 康徳二年七月
 主要機械 長鋼抄紙機 一台、丸鋼抄紙機 一台
 康徳四年度 生産高
 B模造紙 九、四五四、七三三封度
 印刷紙 一、九五五、三三三封度
 純白ロール 三〇八、三三三封度
 クラフト紙 一三九、〇七三封度
 自用包紙 二八六、五三〇封度
 合計 一三、一七三、四〇〇封度
 川表紙 一、九二二、九五九封度
 自用包紙 三、六三三封度
 合計 一、九六六、六三三封度
 (生産年度十二月一十一月)

◎安東造紙株式会社

所在地 安東市鎮安路
 代表者 工藤 雄助
 資本金 五〇〇、〇〇〇圓
 設立年月 康徳三年九月
 主要機械 抄紙機 一台 ポイラー 二基
 生産高 本年一月操業ニテ業績未だ不明

(6) ゴム工業

安東に於けるゴム工業は滿洲事變後關稅改正による製品の稅率引上げによつて急激なる發展をなし爾來朝鮮、日本内地方面よりの投資企業相亞ぎ一時はその數九工場を算へたがその後亦た關稅改正による原料ゴムの稅率引上げは漸く在滿工場にも痛手を與へ操短又は休業者を出す状態であつた。然るにその後奥地方の復興氣分濃厚となり購買力の復活によつて斯業も漸次舊に復し輸入品に對抗して操業も活潑となつて來た。最近國防資源統制によつて原料ゴムの入手困難となつてゐるが業界は依然活氣を呈し待機の姿勢をとつて靜觀してゐる様である。

左に工場の概要を示せば (康徳四年度)

工場名	所在地	代表者	資本金	品名	數量	金額
永昌膠皮工廠	北一條通九	崔昌煥	一八五、〇〇〇圓	品名	數量	金額
				ゴム靴	九〇、三八四足	六三九、〇五一圓
				布靴	一九一、八四四足	

康徳四年生産高

南滿膠皮工廠 中央通八 中川宗禮

10,000

リクレーム 六九、〇四磅 四四、〇四七

ゴム底 一九、八八足 一三、六〇一

ヒール底 二八、五四打 九、四三〇

馬車タイヤ 八、夫〇尺 七、〇〇八

中底 三〇〇、〇〇〇足 五、一〇〇

エポ板 六、九七枚 一、三九四

男用ゴム靴 八三、三三足 四九、三三七

女用ゴム靴 八一、三四足 三三、五〇三

ゴム底布靴及 二七、六五足 一五、〇〇〇

冬綿ウーロ 一五〇、〇〇〇足 一三、七、五〇〇

夏六眼タビ 一五、〇〇〇足 八三、九五〇

運動靴 二五、〇〇〇足 五、二〇〇

アメリカン靴 三、〇〇〇足 三〇、四〇〇

防寒ウーロ靴 六、八〇〇足 八三、九八〇

地下足袋 六三、四〇〇足 四三、四八〇

運動靴 一三、六〇〇足 七、五六〇

三和ゴム株式會社
 安東工場

南四條通四

河野 充

(本店) 八五、〇〇〇

次に製品は殆んど鮮人、滿人向のもので全部短靴である。販路は全滿各地で輸入品に對抗して逐次商圏を擴張してゐる。

(7) 精米業

安東の精米業は滿洲に於て最も歴史古く俗に五龍背米の名によつて廣く世間に知られ早くより全滿北支各方面に觀迎されてゐる。現在精米工場は日滿合せて三〇戸の多きに上り何れも相當の成績を示してゐる。原料粳は赤粳、陸羽が多く例年安奉沿線より四十萬石内外の出廻りを見てゐる。只端境期に於て若干の朝鮮粳の補充を見ることがあるが相場關係によつて例年その數は一定してゐない。

尙最近滿洲國政府は米穀管理法によつて米穀統制をなしこれが需給調整をなすことになつて居りこれが實現の曉は斯業に大革新を來すことと思はれる。

左に精米工場の概要を示せば (康徳四年度)

工場名	所在地	資本金	品名	數量	價額
三省精米所	三番通 四丁目	一〇〇,〇〇〇	白米	三一,〇七〇	九〇〇,四六八
辻山洋行精米所	二番通 一丁目	一〇五,〇〇〇	休業に付不詳		
飯嶋商行	堀割南通八丁目	五〇,〇〇〇		二二,三七三	六〇三,六八二
丸鴨精米所	六番通 九丁目	五〇,〇〇〇		一七,九三五	四八三,二七三
達磨商會精米工場	市場通 五丁目	五〇,〇〇〇		一,一〇〇	二八,六〇〇
興和號	市場通 一丁目	一〇〇,〇〇〇	操業中止		
高信精米所	二番通 四丁目	五〇,〇〇〇	白米	一五,二八〇	四二二,五六〇
			白米	一四,七〇〇	一一七,五〇〇

工場名	所在地	資本金	品名	數量	價額
春滿精米所	南二條通三丁目	一五,〇〇〇		三,六五九	九二,六九八
海東棧精米所	大和橋通六丁目	一一,〇〇〇		三一	八,八六三
三和精米所	堀割南通八丁目	二〇,〇〇〇		七,二〇〇	一八〇,〇〇〇
信益商會	六番通 九丁目	六,〇〇〇	白米	一,九五一	四五,八四八
共昌精米所	一番通 三丁目	一五,〇〇〇	白米	九,五〇〇	二六三,三〇〇
韓興精米所	堀割南通八丁目	一〇,〇〇〇	白米	一,五〇〇	三四,五〇〇
豐順精米所	九丁目	一〇,〇〇〇	休業に付不詳		
亞東精米公司	七丁目	一〇,〇〇〇	碎米	七,〇二〇	一〇五,三〇〇
			白米	五二七	六,三二四
共和精米所	二番通 二丁目	三〇,〇〇〇	白米	三四,二五〇	八九七,六〇〇

◎滿人側

工場名	所在地	資本金	品名	數量	價額
同利成	縣前街	一一,〇〇〇圓	白米	八〇五石	七,九八六圓
鴻玉福	〃	一五,〇〇〇	〃	四,二七三	五四,七二九
同義合	〃	三,〇〇〇	〃	三,二一八	四一,六七〇
仁盛泰	新安街	一六,〇〇〇	〃	九,四〇七	一一二,一九二
仁盛元	〃	八,〇〇〇	〃	四,九九一	六五,三七七
成豐義	縣前街	一,四〇〇	〃	九三七	一〇,九七四

六三

六二

月別	大同二年	康德元年	康德二年	康德三年	康德四年
三月	二〇、六	一七、八〇	二九、五〇	三五、〇〇	三五、三〇
二月	二二、〇〇	一九、五〇	二九、〇〇	三五、〇〇	二六、〇〇
一月	二二、〇〇	一九、五〇	二七、六六	三五、〇〇	二六、〇〇
合 計	九〇、九〇〇	六六、〇〇〇	八四、一三	九〇、〇二一	六五、六九四
永 成 泰	新 安 街	一、〇〇〇	二、五八四	三三、四四七	八四、九九〇
天 合 泰	長 興 街	一、〇〇〇	二、四一〇	三〇、九五六	六九、七六六
永 生 德	興 東 街	一、五〇〇	五、三九五	六、六〇二	三、九六四
公 大 糧 棧	新 安 街	二、〇〇〇	三、〇四三	一、六五八	二一、四六七
寶 興 盛	縣 前 街	一、〇〇〇	一、五〇〇	五、三九五	六、六〇二
協 豐 順	縣 前 街	一、〇〇〇	一、五〇〇	三、〇四三	一、六五八
東 和 成	縣 前 街	一、〇〇〇	一、五〇〇	三、〇四三	一、六五八
永 昌 德	縣 前 街	一、〇〇〇	一、五〇〇	三、〇四三	一、六五八
德 豐 泰	縣 前 街	一、〇〇〇	一、五〇〇	三、〇四三	一、六五八
永 豐 裕	新 安 街	一、〇〇〇	一、五〇〇	三、〇四三	一、六五八

(註) 生産高數量單位、新滿洲石トス
 ◎安東に於ける白米相場 (滿洲米無検査特等單位一石當り)

月別	大同二年	康德元年	康德二年	康德三年	康德四年
四月	三〇、六	一七、八六	二八、五〇	二六、八〇	三五、六〇
五月	二二、三	一九、〇〇	二九、〇〇	二八、一六	二六、五〇
六月	二二、五〇	二二、三三	二八、八三	二九、〇〇	二五、三〇
七月	三三、四〇	二四、六〇	二九、〇〇	二八、五〇	二六、〇〇
八月	三三、〇〇	二六、〇〇	二九、〇〇	二八、五〇	二六、〇〇
九月	三二、六	二七、一六	二八、六	二九、〇〇	二六、七〇
十月	二二、〇〇	二五、九	二七、一六	二六、〇〇	二六、五〇
十一月	三〇、五〇	二四、八三	二五、〇〇	二三、〇〇	二六、六〇
十二月	一九、六	二七、三	二四、〇〇	二五、三	二七、〇〇

(8) 醸造業
 (イ) 清酒工場

安東に於ける清酒醸造は現在日本人經營のみであるが全滿中最も股賑を呈し生産品は廣く全滿各地に販賣されてゐる。元來安東は原料米、水等の優良なるものを有し清酒醸造地としては最も好條件を具備して居り早くから斯業の振興を見てゐたのであるが殊に滿洲事變後輸入酒の關稅率引上げによつて一層業績上り安東清酒醸造業の黄金時代を出現した。その後第二次第三次の關稅改正によつて輸入酒との對抗上多少の消長はあつたが漸次商圏を擴張し滿洲酒としての名聲を博し現在に至つたものである。

左に清酒醸造工場を示せば

工場名	代表者	資本金	康徳五年仕込量	商標
石川酒造場	石原政之	五〇,〇〇〇圓	一、八六五石	新世界、寒菊、萬歲樂
手塚酒造場	手塚藤久二	二〇,〇〇〇	一、一三七	平和、藤正宗、千歲鶴
合名會社村上酒造場	村上眞次郎	二〇,〇〇〇	九三七	金鷹、金波
合資會社大下酒造場	鴨狩直治	六〇,〇〇〇	一、五一四	白鷺、國華、金盃、白菊
原田酒造場	原田正一	三〇,〇〇〇	一二四	富士正宗、金盃正宗
田原商店	田原英雄	三〇,〇〇〇	一、三七三	昭光、稻鶴、鷹正宗、玉澤
大塚酒造場	岡崎龜藏	一八,〇〇〇	六九八	滿洲金露、譽一鴨正宗
大久保酒造場	大久保義人	七,〇〇〇	四一	醉櫻

(口) 味噌醬油醸造業

豐富なる原料を背後地、鐵道沿線に有し生産コストの安價なる點が非常に有利であり且つ生産品は日鮮滿人共に廣く需要ある關係上斯業も逐年隆盛を辿つて來てゐる。

工場名	代表者	資本金	康徳四年生産高
福島日東號	福島芳子	三五,〇〇〇圓	數量 金額 三九、二七貫 一、二七〇石 三〇石 一、三、六九圓 五、六五〇 二、一〇〇
田原商店	田原英雄	三〇,〇〇〇	數量 金額 一、四、〇〇貫 一、〇〇〇石 三〇石 三、〇〇〇 二、〇〇〇 八〇〇

永田商店	永田秀太郎	二〇,〇〇〇	酢	二〇〇石	四、〇〇〇
大和酢屋	佐々木靜馬	二、〇〇〇	酢	二〇〇石	二、四〇〇
江戸屋	鈴木熊吉	一、〇〇〇	ソース	一三石	六〇〇
同立居	岡夢喜	一、六五〇	味噌油	四一、〇〇〇斤 八、〇〇〇斤 一六、〇〇〇斤	四、一〇〇 八〇〇 四八〇
通源南醬園	陳張林	一、五〇〇	味噌油	三五、〇〇〇斤 一五、〇〇〇斤 六〇、〇〇〇斤	三五、〇〇〇 一、八〇〇 一、七五〇
公和順	劉治成	八〇〇	味噌油	三〇、〇〇〇斤 一五、〇〇〇斤 一五、〇〇〇斤	三、〇〇〇 四、五〇〇 四、五〇〇
天德居	郭純仁	五〇〇	味噌油	三三、〇〇〇斤 三〇、〇〇〇斤 三、〇〇〇斤	一、一〇〇 一、二五〇 六〇〇
利通號	劉荊山	四〇〇	味噌油	一五、〇〇〇斤 一〇、〇〇〇斤 一〇、〇〇〇斤	一、五〇〇 一、五〇〇 三、八〇〇

瑞生福	廣泰居	萬興醬園	大通南醬園	寶慶泉	振興醬園	恒德居	復源湧	匯海居
作天成	賈立聖	姜萬年	鄒國翹	陳東一	洪秉衡	宋吉恒	王慶祥	慕開禮
五〇〇	七五〇	一、〇〇〇	一、五〇〇	一、〇〇〇	一二、三〇〇	二、四〇〇	一、四〇〇	三、五〇〇
酢醬味油	酢醬味油	酢醬味油	酢醬味油	酢醬味油	酢醬味油	酢醬味油	酢醬味油	酢醬味油
五、〇〇〇	四、五〇〇	一、〇〇〇	二、五〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	一、八〇〇	一、七〇〇	一、〇〇〇
八二〇	六七五	三三〇	四〇六	一、〇〇〇	一、〇〇〇	三、四〇〇	五二〇	一、〇〇〇

六八

同春德	增發祥
楊殿春	馬宗恒
五〇〇	五〇〇
酢醬味油	酢醬味油
三、〇〇〇	二、六〇〇
三三〇	三六〇

(註) 滿人工場の生産數量ハ新滿斤トス
 (ハ) 燒酒、黃酒醸造業

日本内地人が清酒を嗜好する如く滿人は燒酒、黃酒を常用酒とする關係上安東にも早くより斯業の發達を見康徳四年末燒酒醸造工場七戸黃酒工場十三戸を算へ逐年隆盛を來してゐる。

工場名	代表者	資本金	燒酒數	金額
福記燒鍋	石韞璞	四、〇〇〇圓	九六四石	三、四八四圓
裕隆燒鍋	姚賢輔	一四、〇〇〇	一、四九九	五、五六九
豐順燒鍋	柴橋種太郎	二〇、〇〇〇	一、四五一	五、二六九
裕豐燒鍋	單春光	三〇、〇〇〇	一、五六三	五、四一七
福春燒鍋	川本勘一	四、〇〇〇	八三八	三〇、一八二
康德燒鍋	川本勘一	一〇、〇〇〇	一、〇五七	三、三〇一
鴨江泉	由龍周	三、〇〇〇	二八五	九、四五七
鎮江泉	林萬里	一、〇〇〇	一一〇	二、九二四

六九

榮發號	王寶齋	四〇〇	三	八八九
寶興泉	盧林鳳	四〇〇	四	一、三九六
德興泉	李璟玉	二〇〇	三〇	一、〇三〇
玉興湧	陸玉麟	一、〇〇〇	四四	一三、一九九
杏花村	趙錫三	一、〇〇〇	一四〇	四、三五六
義興居	遲肇成	一、〇〇〇	二九	六、七四三
公聚長	國雲福	二、〇〇〇	三	一、〇六三
裕順湧	方思九	一、〇〇〇	一八五	五、六二二
公合春	趙銘九	五〇〇	四八	一四、六三七
永順源	葛華年	四五〇	一九	六、〇三三
同合祥	李子明	一、〇〇〇	一八六	五、五九三

七〇

(9) 靴下製造業

(註) 數量單位ハ新滿石トス

現在滿人經營の靴下工場二九戸あり主として滿人向靴下を製造してゐる。滿人間にては靴下は衣服の一部として欠くべからざる必需品であるため斯業も人口の増加と共に年々發展し生産品も遠く滿洲各地に販路を有するに至つてゐる。左に康徳四年中に於ける工場の概要を示せば

工場名	代表者	資本金	數量	金額
仁大號	高緒大	五、五〇〇圓	四三、〇九七打	六三、六九〇圓
同昌隆	蔡學舫	二、〇〇〇	三三、九七七	四六、七五
滙通機廠	王啓相	二、〇〇〇	三三、八〇五	六一、三七八
明德機廠	孫階三	六、〇〇〇	三三、一七〇	八三、三六
仁玉號	周仁聲	九〇〇	一六、四九三	二四、九〇三
同興恒	王明先	七五〇	三、七七八	四、二九六
德興恒	王貴先	九〇〇	五、一九八	七、六八
雙合恒	景守一	四五〇	一〇、七三三	一六、二九
振興東	李介人	一、〇〇〇	六、八〇六	九、七三五
福成遠	徐履亨	八、〇〇〇	三三、三三九	六〇、〇六六
晨光工藝社	王景濂	九〇〇	八、六七九	二四、一六
廣盛昌	湯煥亭	二、七〇〇	三七、七二一	六三、九六
鎮泰東	葛鎮西	二、〇〇〇	一五、五七七	三五、八五〇
恒盛工廠	梁恒盛	三〇〇	五、三四四	六、四一四
同發盛	李良臣	一〇〇	一、四三四	一、一三一

七一

福慶隆	董鑑古	五〇〇	一七、六九九	三三、三八
祥記棧廠	周國棋	三〇〇	二、五二二	一、五〇七
永裕興	馬錫三	三〇〇	九、五〇八	九、七五四
星臨棧廠	王吉堂	六〇〇	四、〇七七	五、三八七
雙合棧廠	白世暖	三〇〇	一、〇〇四	一、三三四
興盛永	王維修	三〇〇	四、六二八	六、五〇四
福記號	葛成立	三〇〇	一、三六〇	一、〇〇三
文祥號	孫維增	二〇〇	七、七五	九三〇
恒豐棧廠	胡兆義	三〇〇	一、三三七	一、六九五
協和昌	周子英	三〇〇	三、八	一、三〇一
大誠工廠	方慶順	三〇〇	一、七四〇	一、四三七
福祿工廠	李德志	三〇〇	七〇〇	一、二九六
雲成祥	高雲清	三〇〇	三、八九	三、八八
雙合成	張心田	三〇〇	一、〇五五	六九五

(10) 其の他

滿洲事變後治安の確立と共に逐次滿洲各地の資源開發に着手されるや最も有望視され、將來性をかけられたのは安東の背後地東邊道である。事實又東邊道一帯は天然の資源豊富にしてこれが資源開發は滿洲國産業開發五ヶ年計劃によつて一躍重要性

を増しこれが序曲として東邊道縱貫鐵道の敷設、鴨綠江水電の着工を見、これに關聯して安東の工業地帯化も愈々實現の可能性濃厚となりすでに滿洲輕金屬安東アルミニウム工場、滿洲石綿工場等の大工場が續々と建設決定し、之に加へて最近大安東市の都市計劃發表、鴨綠江河港灣問題の擡頭等によつて愈々工業都市化を促進され從來の商業都市より一變して大工業地としての活躍が期待されてゐる。

(11) 勞力

安東には年々多數の山東移民の上陸を見るが彼等の大部分は所謂勞働者としての素質を有し而かも低廉なる賃銀で長時間の勞働に耐へ体力強健であつて凡ゆる方面の勞働に従事してゐる。これら勞働者中には技術的にも相當の熟練者が居て工場方面にも歡迎されてゐる。

只彼等の欠点とする所は文化の程度低く無教育、不衛生で時間的觀念に乏しい事でこれがため相當の指導、監督を要するのである。然しながら前記有利條件を先天的に具備してゐるため若干の欠点は補填され年々その需要を増してゐる。然るに康徳元年三月安東警察廳は滿洲國の治安及び衛生上の見地からして入滿苦力の取締實施を發表したため一時各方面に大影響を與へたかの様であつたが其の後適宜の方法によつて身元証明による入國許可制を採るに至りこの勞力問題も緩和され寧ろ以前に比して良質なる勞働者を得られることになつて來た。その後滿洲國産業開發計劃樹立されるや勞力問題は殊に重要性を帯び遂に滿洲勞工協會の出現を見、該協會によつて全滿的に勞力の調整、統制化を圖り安東も該協會によつて調整されつゝある。

元來山東勞働者は天津、芝罘、青島等より大舉出稼きに出るが仕事の關係上春季に渡來して秋末に歸山するものと、入滿のまま滿洲内に留るもの二様がある。左に最近の山東移民の安東上陸數を示せば

民國十九年

四八、五三六人

康徳 元年

二〇、六四二人

二十年	四、五、一二九	二年	二二、四三三
大同元年	四〇、五〇〇	三年	二四、六一四
二年	六〇、一三〇	四年	一一、四〇三

次に鮮人労働者も滿洲事變前迄は民族的壓迫を受けて滿人労働者に對抗出来なかつたが滿洲國獨立後は當局の斡旋によつて漸次鮮人労働者の數を増し滿人労働者間に伍して活動出来得る様になつて來た。只鮮人労働者は滿人労働者に比較し賃銀高く耐久力の少い点が劣つてゐるが一面技術的に長じ文化の程度も高いので近代工業にも適し安東では主として紡績、ゴム、製紙等の技術労働者として活躍してゐる。

最近の安東市に於ける勞銀を示せば (康德五年八月現在)

職名	支給別	日本人	朝鮮人	滿洲人
大工職	日給	三、五〇	二、〇〇	一、八〇
左官職	"	四、〇〇	"	二、〇〇
石工職	"	四、〇〇	"	一、八〇
墨職	"	三、五〇	二、〇〇	一、五〇
指物職	"	三、四〇	"	一、六〇
ペンキ職	"	三、四〇	"	一、三〇
活版印刷職	"	"	一、三〇	一、三〇
製本職	"	"	一、〇〇	一、〇〇



職名	月	日	苦力
鍛冶職	"	"	三、五〇
油房搾油工	"	"	一、七五
洋服裁縫職	"	"	二二、〇〇
製材工	"	"	五〇、〇〇
自動車運轉手	"	"	八〇
苦力	"	"	日、八〇
	"	"	五〇、〇〇
	"	"	〇、五〇

(12) 電力

現在安東に於ける電力は滿洲電業株式會社によつて供給されて居り、市内に一萬六千キロの火力發電所を有し市内、近郊及新義州に送電をなしてゐるが近く鴨綠江水電の六十萬キロ發電によつて安東へも低廉なる電力の供給を受ける事になり大工業都市としての電力問題も解消されることと思はれる。

康德四年中に於ける安東市内の電力供給量を示せば

供給先	契約容量	供給先	契約容量
紡績工業	九、六四二、四 ^{H.P.}	食品嗜好工業	二〇、五七二、九 ^{H.P.}
金屬工業	四五七、四	製材及木製品工業	一八、〇〇八、四
窯業	二、二三六、五	印刷製本業	七八一、五
機械器具工業	九七六、九	其他	九、一四六、四
化學工業	六、九三五、九	合計	六八、七五八、三
			七五

九、金 融

(1) 通 貨

從來滿洲には統一した貨幣制度と云ふものがなく各地方に於て夫々通貨も異つて居り複雑極まるものであつたが滿洲國の獨立以來漸次之等不統一の貨幣を統一し中央銀行をして幣制の確立をなさしめ現在では全く國幣に統一され若干の外國通貨(鮮銀券日銀券)を見るに過ぎなくなつて來てゐる。

元來安東地方には古くより鎮平銀(一名馬蹄銀)及び小洋錢なる通貨があり特に鎮平銀は安東附近に於ては經濟界に密接な關係を有し兩なる單位を以て特産取引には必ずこの鎮平銀建を用ひ又滿洲街に於いては他の通貨の相場標準ともなり通貨中에서도重要な役割を占めてゐたものである。小洋錢は一般通貨として廣く流通してゐたが滿洲國樹立以來これらローカルマネーは漸次統一され前者は康德元年九月三十日限り、後者は全年十二月二十七日限り夫々流通禁止となつた。

(2) 金融機關

現在安東市内の金融機關としては銀行、金融組合、信託、輸入會社、質屋、金融合作社等がある。

(イ) 銀行 (康德五年八月現在)

名 稱	資 本 金	代 表 者
滿洲中央銀行安東支行	三〇,〇〇〇,〇〇〇圓	石川洋爾
興業銀行安東支店	三〇,〇〇〇,〇〇〇	高田克
市場通支店		宇宿敬次

興隆街支店

協成銀行	一,〇〇〇,〇〇〇	高田克
安東實業銀行	五〇〇,〇〇〇	中川憲義
東邊實業銀行	一,五〇〇,〇〇〇	大原清逸
安東地方銀行	四〇〇,〇〇〇	范先和
中國銀行安東支行	二五,〇〇〇,〇〇〇	于光晨
義來銀行	一〇〇,〇〇〇	饒鳴楷
福徳銀行	五〇〇,〇〇〇	劉子文
興義銀行	二〇〇,〇〇〇	孫景堂
天和銀行安東支行	五〇〇,〇〇〇	馬茨蕭
王輔國		王輔國
(ロ) 信 託		
安東晝夜無盡株式會社	五〇〇,〇〇〇	瀨之口藤太郎
安信無盡株式會社	六〇,〇〇〇	田邊熊治
(ハ) 金錢貸付業		
出資金		
安東金融組合	一〇八,〇〇〇	大津峻
安東金融會	二八,二三〇	李忠根
安東金融合作社	一四,一九五	平野豊八郎

安東商事金融株式會社
滿洲輸入會社安東支店

七〇〇,〇〇〇
五,〇〇〇,〇〇〇

藤平泰一
錦織琢

七八

(二) 質業
市内日鮮滿人經營のもの五十七戸あつて夫々庶民金融機關として市内金融に一重要役割をなしてゐる。

日本人經營 八戸
朝鮮人經營 二戸
滿洲人經營 四七戸

右の中滿人質業は廣く一般商工業者にも利用され商工資金としての利用多く業績も日鮮人經營のそれに比して見るべきものがある。

(3) 金融狀況

安東組合銀行の業績を示せば

(イ) 預金、貸出

預金	大同三年末				康德元年末				康德二年末				康德三年末				康德四年末				
	定期預金	當座預金	特別當座預金	其他預金	定期預金	當座預金	特別當座預金	其他預金	定期預金	當座預金	特別當座預金	其他預金	定期預金	當座預金	特別當座預金	其他預金	定期預金	當座預金	特別當座預金	其他預金	
合計	四、三七五、二七〇圓	二、三八六、九一〇	一、五八、四五七	二、八〇五、八六三	五、〇五三、二〇四圓	二、〇三七、七七〇	一、五五、七六六	九、五七七、六九九	六、三三八、九三三圓	二、二八四、八七〇	一、八四、三九八	一、〇四八、三四九	二、四九六、五〇〇	四、三三七、九九九圓	二、一六四、〇九二	一、六〇八、九五七	七、四、七六一	八、三七三、六七九	六、五〇八、九六三圓	三、二二六、〇九〇	一、六四四、三二〇

貸出

貸出	大同二年末				康德元年末				康德二年末				康德三年末				康德四年末			
	手形貸付	商業割引手形	担保付割引手形	當座貸越	手形貸付	商業割引手形	担保付割引手形	當座貸越	手形貸付	商業割引手形	担保付割引手形	當座貸越	手形貸付	商業割引手形	担保付割引手形	當座貸越	手形貸付	商業割引手形	担保付割引手形	當座貸越
合計	九、八〇一、九五三圓	六四三、四七九	一、二七九、五五一	一、三六五、二一一	一〇、八五三、九二一圓	一、五三四、一三〇	一、三三八、四三六	二、〇九五、一三四	一〇、二六、六九三圓	一、三三九、八一〇	一、三六一、七七三	九七五、三四三	一三、七三三、六〇一	七、九五五、〇二二圓	八〇七、八六〇	一、〇八七、三五七	一〇、七七三、五三七	二、〇八九、八四四圓	二、五五、四四三	一、五〇〇、六八三

(備考) 右表預金貸出共康德二年迄ハ金票ノミノ勘定トス

(ロ) 手形交換高

年別	枚數	金額
大同二年	三三、六七九	四三、四五四、四九〇圓
康德元年	三八、六三七	四〇、九三五、〇〇〇
二年	三七、一七七	三七、五八〇、四一四
三年	三四、二七五	二六、二六六、八二六
四年	七六、七五五	七四、三〇一、三四〇

(ハ) 爲替取扱高

年別	仕向	被仕向
大同二年		
康德元年		
二年		
三年		
四年		

大同二年	金幣	七三、三三三、八四三圓	八七、八三〇、三三三圓
康徳元年	〃〃	七六、四三〇	二四、九四五
〃	〃〃	八五、三五、三五八	八三、八五六、九一九
〃	〃〃	一、八八八、三六八	二、三三一、三三四
二年	〃〃	二二、二四一、一六二	一五、三〇七、八九一
〃	〃〃	四、八七六、〇八一	六、六〇七、七六九
三年	〃〃	六五、一八五、八一	六八、二〇五、四三三
〃	〃〃	二、七六六、七二六	三、三三〇、二六
四年	國幣	三〇、一六七、三〇八	五〇、三三九、七七三

(二) 其他金融機關の業績 (康徳五年九月末現在)

◎安東金融組合

組合員	四六名
預り金	七七〇
貸出金	三〇九〇
組合員	二、三二名
預り金	二、一八三〇
貸出金	二、三九〇〇

◎安東金融合作社

組合員	二、八三九名
預り金	六〇五名
貸出金	一、五五三名
組合員	二、三三、三三七圓
預り金	二二、三、三三七圓
貸出金	三〇九、三七九圓

◎滿洲輸入株式會社安東支店

該支店は去る康徳五年七月一日從來の輸入組合の改組によつて設立されたものであつて未だ業績は詳かでない。

◎實業

利用者及入質件數	八、三五五人	一〇、二四件	(康徳五年八月末現在)
貸出	三〇三、一八八件	九三、二四九圓	(康徳五年上半期分)
回収	三〇〇、二九件	六九、四九圓	()
流質	四、七九件	七九、八四〇圓	()

廣徳五年十二月二十五日印刷
 廣徳五年十二月二十八日發行
 (印刷費八十錢)
 安東市大番通三丁目
 發行人 新田 忠平
 編輯人 久保 恭一
 安東市大番通五丁目
 印刷人 酒井 竹四郎
 安東市大番通四丁目
 印刷所 安東印刷所
 安東市西番通六丁目
 發行所 安東商工公會
 安東市大和通三丁目
 電話
 三〇四一
 三〇四二
 三〇四三
 三〇四四
 三〇四五
 三〇四六
 三〇四七
 三〇四八
 三〇四九
 三〇五〇

廣徳五年十二月二十五日印刷
 廣徳五年十二月二十八日發行
 (印刷費八十錢)
 安東市大番通三丁目
 發行人 新田 忠平
 編輯人 久保 恭一
 安東市大番通五丁目
 印刷人 酒井 竹四郎
 安東市大番通四丁目
 印刷所 安東印刷所
 安東市西番通六丁目
 發行所 安東商工公會
 安東市大和通三丁目
 電話
 三〇四一
 三〇四二
 三〇四三
 三〇四四
 三〇四五
 三〇四六
 三〇四七
 三〇四八
 三〇四九
 三〇五〇

781
109

781
109

